

日本学術振興会 科学研究費補助金・基盤研究（B）
比較文学比較文化研究の理論再構築と
一般知への還元に関する総合的アプローチ

社会調査最終報告書

【データ編】

Contents

第 I 部 比較文学比較文化教育についての統計調査

第 II 部 比較文学比較文化教育についてのシラバス調査

今橋映子（東京大学教授）

井上 健（東京大学名誉教授）

韓 程善（釜山大学副教授）

西田桐子（和光大学講師）

町田 樹（國學院大學准教授）

第 I 部 比較文学比較文化教育についての統計調査

第 I 部では、[本科研費プロジェクト](#)の一環として実施した比較文学比較文化の研究・教育分野を対象とした統計調査のデータを一覧化している。

なお、統計調査の概要は以下の通りである。

【調査名】 「比較文学比較文化についての統計調査」

【調査期間】 2022年5月12日～7月31日

【質問紙構成】 4部構成・計32問

【調査方法】 Google Form

【サンプリング】 割り当て抽出法

割り当て抽出法担当者：

- ・ 井上 健（東京大学名誉教授）
- ・ 今橋映子（東京大学総合文化研究科教授）

【データ回収率】 84回収／134配布 回収率＝64%

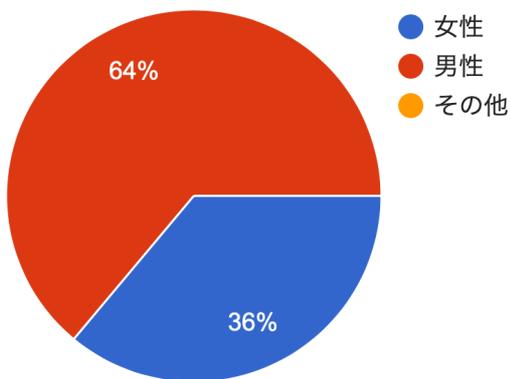
【統計分析方法】 SPSS Ver.24

※なお、本調査の手続きやデータ解釈に関する詳細については、東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）発行のブックレット『[「比較研究とは何か」を語る二つの視座](#)』52～66頁と『[社会調査最終報告書（ワークショップ編）](#)』5～24頁を参照されたい。

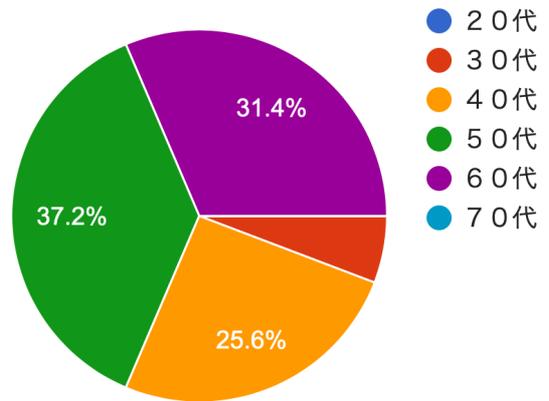
| 部 | Q (設問) | 設問内容 | 設問形式 | ページ数 |
|-----------------------------------|-----------------|----------------------------|--------------|-------|
| PART I : 属性に関する問い | | | | |
| I | Q1 | 性別 | 選択項目 | 3 |
| | Q2 | 年齢 | 選択項目 | 3 |
| | Q3 | 所属学部 | 選択項目 | 3 |
| | Q4 | 勤務形態 | 選択項目 | 3 |
| | Q5 | 比較に関する教育歴 | 選択項目 | 3 |
| | Q6 | 母語 | 自由記述 | 4 |
| | Q7-1 | 第一外国語 | 自由記述 | 4 |
| | Q7-2 | 第二外国語 | 自由記述 | 4 |
| | Q7-3 | 第三外国語 | 自由記述 | 4 |
| PART II : 研究活動に関する問い | | | | |
| II | Q8 | 専門となる研究対象に関わりのある国 | 自由記述 | 5 |
| | Q9 | 専門となる研究対象のジャンル | 選択項目 (複数選択可) | 6 |
| | Q10 | 研究のキーワード | 自由記述 | 7~8 |
| | Q11 | 授用経験のある比較の理論及び概念 | 選択項目 (複数選択可) | 9 |
| | Q12 | 比較関連教科書の執筆経験 | 選択項目 | 6 |
| PART III : 担当科目に関する問い | | | | |
| III | Q13 | 開講科目名 | 自由記述 | 10 |
| | Q14 | 当該科目の設置部門 | 選択項目 | 6 |
| | Q15 | 当該科目の授業題目 (テーマ) | 自由記述 | 11~12 |
| | Q16 | 当該科目の授業形態 | 選択項目 | 6 |
| | Q17 | 当該科目の配当年次 | 自由記述 | 14 |
| | Q18 | 当該科目の開講期間 | 選択項目 | 6 |
| | Q19-1 | 教科書使用の有無 | 選択項目 | 13 |
| | Q19-2 | 使用教科書名 | 自由記述 | 15 |
| | Q20 | シラバスに記載の参考書 | 自由記述 | - |
| | Q21 | 当該科目が設置されている目的 | 選択項目 (複数選択可) | 13 |
| | Q22-1 | 受講者に求める外国語能力の有無 | 選択項目 | 13 |
| | Q22-2 | 受講者に求める外国語 | 自由記述 | - |
| | Q23 | 当該科目の受講者数 | 選択項目 | 13 |
| | Q24 | 当該科目で教えるように配慮している比較の理論及び概念 | 選択項目 (複数選択可) | 9 |
| | Q25 | 当該科目履修生のニーズ | 自由記述 | 15~18 |
| Q26-1 | 当該科目における受講者の意欲 | 5段階リッカート | - | |
| Q26-2 | 当該科目における受講者の理解度 | 5段階リッカート | - | |
| PART IV : 比較文学比較文化教育に関する問い | | | | |
| IV | Q27-1 | 大学における比較教育の位置づけ | 5段階リッカート | 19 |
| | Q27-2 | 危ぶまれている理由 | 自由記述 | 19~20 |
| | Q28 | 比較教育における工夫 | 自由記述 | 21~24 |
| | Q29 | 比較関連教科書に関する要望 | 自由記述 | 25~28 |
| | Q30 | 比較教育の問題点や困難 | 自由記述 | 29~33 |
| EXTRA PART | | | | |
| Ex | Q31 | 感銘を受けた比較の授業 | 自由記述 | 34~36 |
| | Q32 | 比較教育に対する意見 | 自由記述 | 37~39 |

※本調査で用いた質問紙は本調査報告書末尾に添付している。

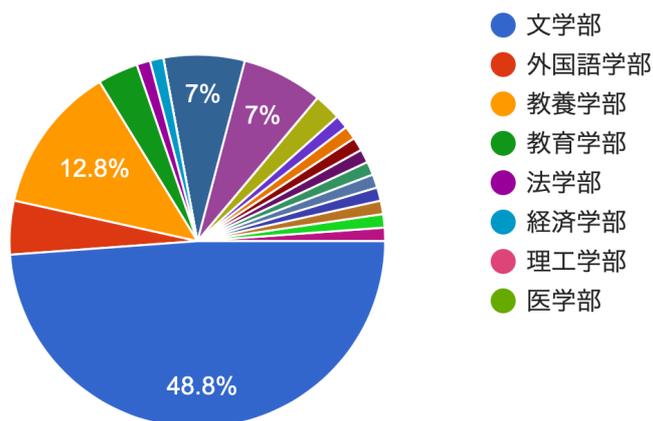
【Q1】性別



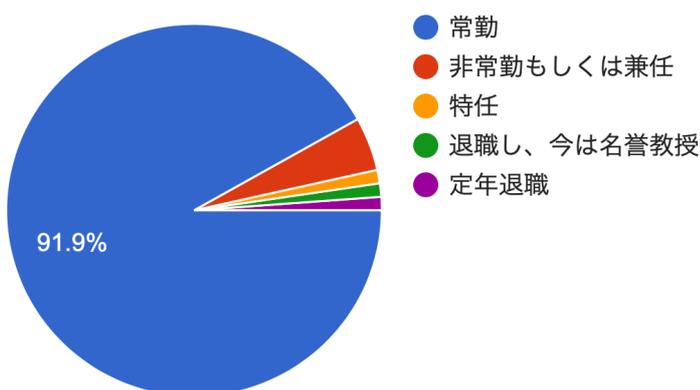
【Q2】年齢（年代別）



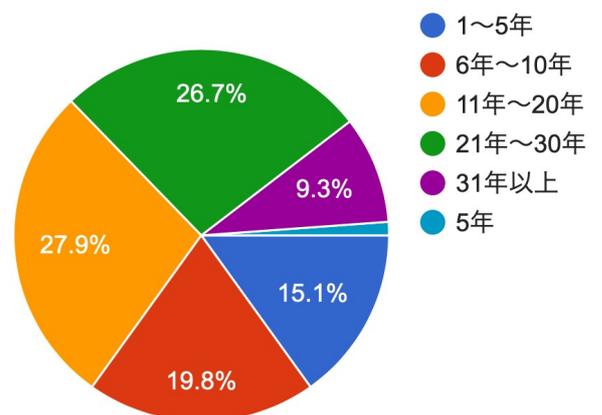
【Q3】所属学部



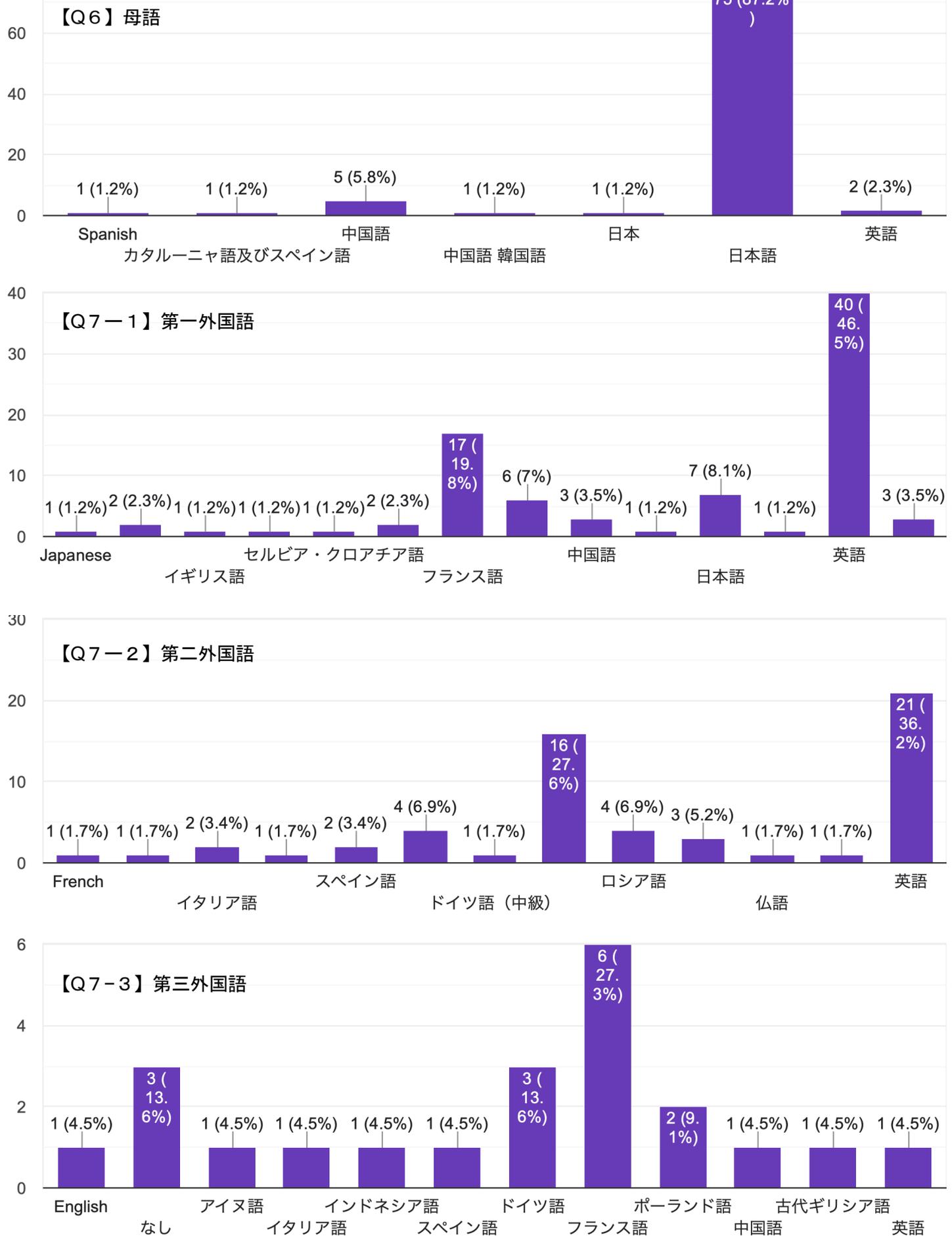
【Q4】勤務形態



【Q5】比較文学比較文化の教育歴



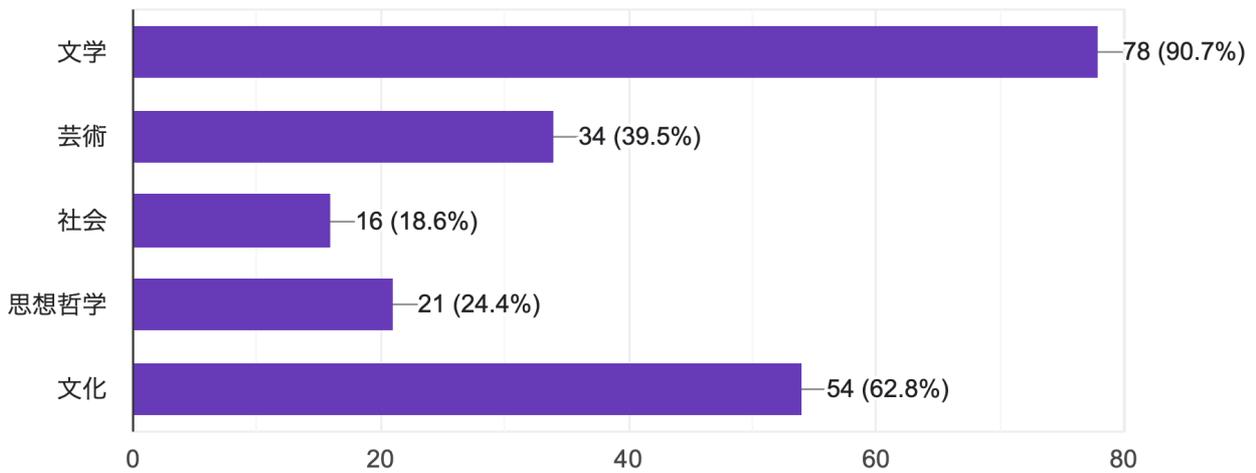
社会調査最終報告書【データ編】



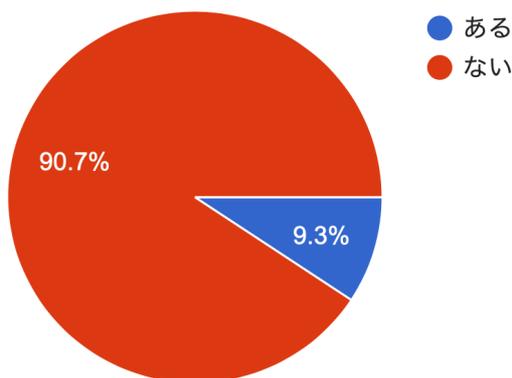
【Q8】専門となる研究対象に関わりのある国

- フランス 日本
- ロシア
- アメリカ、イギリス、フランス
- 日本
- アメリカ、日本、イギリス
- 日本、イギリス、ドイツ
- フランス、イギリス、日本
- ロシア、アメリカ、日本
- イギリス、アイルランド アメリカ
- アメリカ
- 中国 日本 台湾
- アメリカ ドイツ イギリス
- 日本/中国/アメリカ
- 韓国、中国、欧米
- ポーランド、フランス
- イギリス、日本
- イギリス
- ロシア、ベラルーシ、韓国
- 日本、中国、台湾
- フランス、ベトナム、日本
- ドイツ、スイス、オーストリア
- 日本、アメリカ、フランス
- 連合王国（イギリス）、アメリカ合衆国
- ポーランド、米国、ブラジル
- 日本、中国、韓国
- 日本、スペイン、イギリス
- 日本・スペイン・フランス
- イタリア、フランス、イギリス
- フランス ドイツ
- アメリカ、日本
- 日本、英国
- 日本、ロシア、イギリス
- 日本、アメリカ、イギリス
- 韓国、中国
- イギリス、インド、韓国
- 中国、日本
- 日本 アメリカ フランス
- ロシア 日本
- 地域を書くと個人が特定されるため未回答
- 中国、アメリカ、イギリス
- アイルランド、アメリカ、イギリス
- インド、パキスタン、イギリス
- イギリス
- イギリス、フランス
- メキシコ、日本、フランス
- 日本、フランス、ドイツ
- イギリス、アメリカ、フランス
- 日本、イギリス、アメリカ
- フランス
- 日本 フランス
- 日本 中国 フランス ドイツ アメリカ 韓国
- アメリカ、イギリス、韓国
- アメリカ・日本
- スペイン アルゼンチン メキシコ
- 英国 米国 フランス
- イギリス、アメリカ、ドイツ
- 中国、台湾、香港
- 中国、台湾、日本
- 古代ローマ帝国
- アメリカ、日本、スペイン
- 日本、ロシア
- 日本、韓国、中国
- 日本・中国・韓国
- ユーゴスラヴィア
- 中国
- ロシア フランス ドイツ
- 日本 イギリス フランス
- アメリカ合衆国、フランス、カナダ
- フランス、ベルギー、イギリス
- アメリカ合衆国、イギリス、スペイン
- ロシア アメリカ
- 中国、フランス
- イギリス・アメリカ・中国
- 英国
- イギリス アメリカ合衆国 日本
- フランス、アメリカ、日本
- 日本、米国、ドイツ
- 日本、イギリス
- アイルランド、イギリス、日本

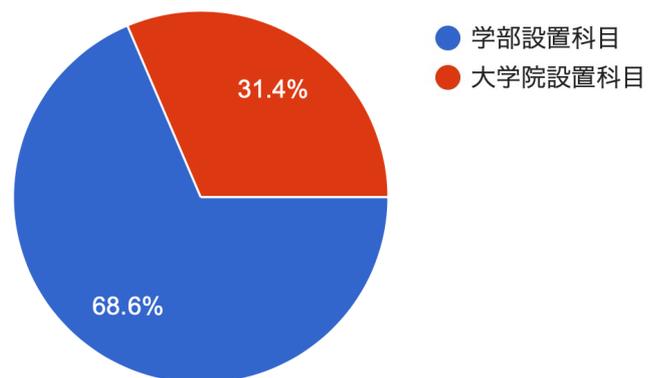
【Q9】専門となる研究対象のジャンル



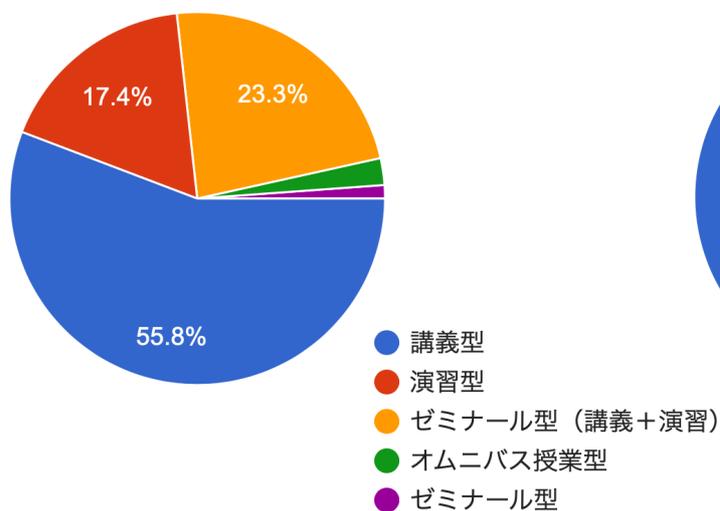
【Q12】教科書の執筆経験



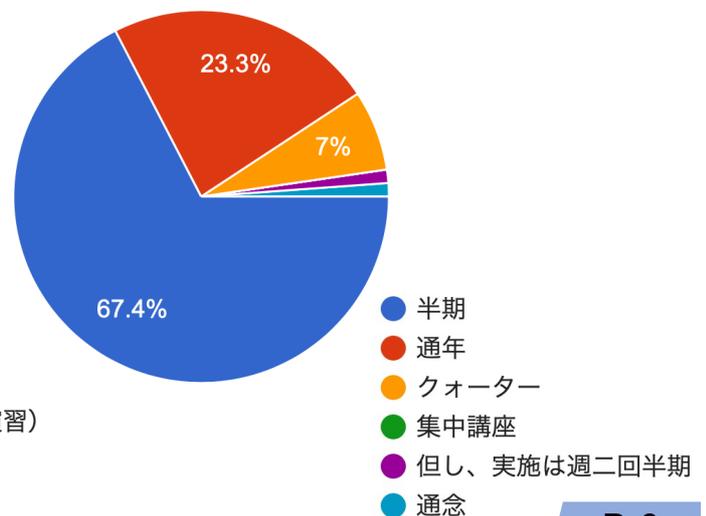
【Q14】当該科目の設置部門



【Q16】当該科目の授業形態



【Q18】当該科目の開講期間



【Q10】研究のキーワード

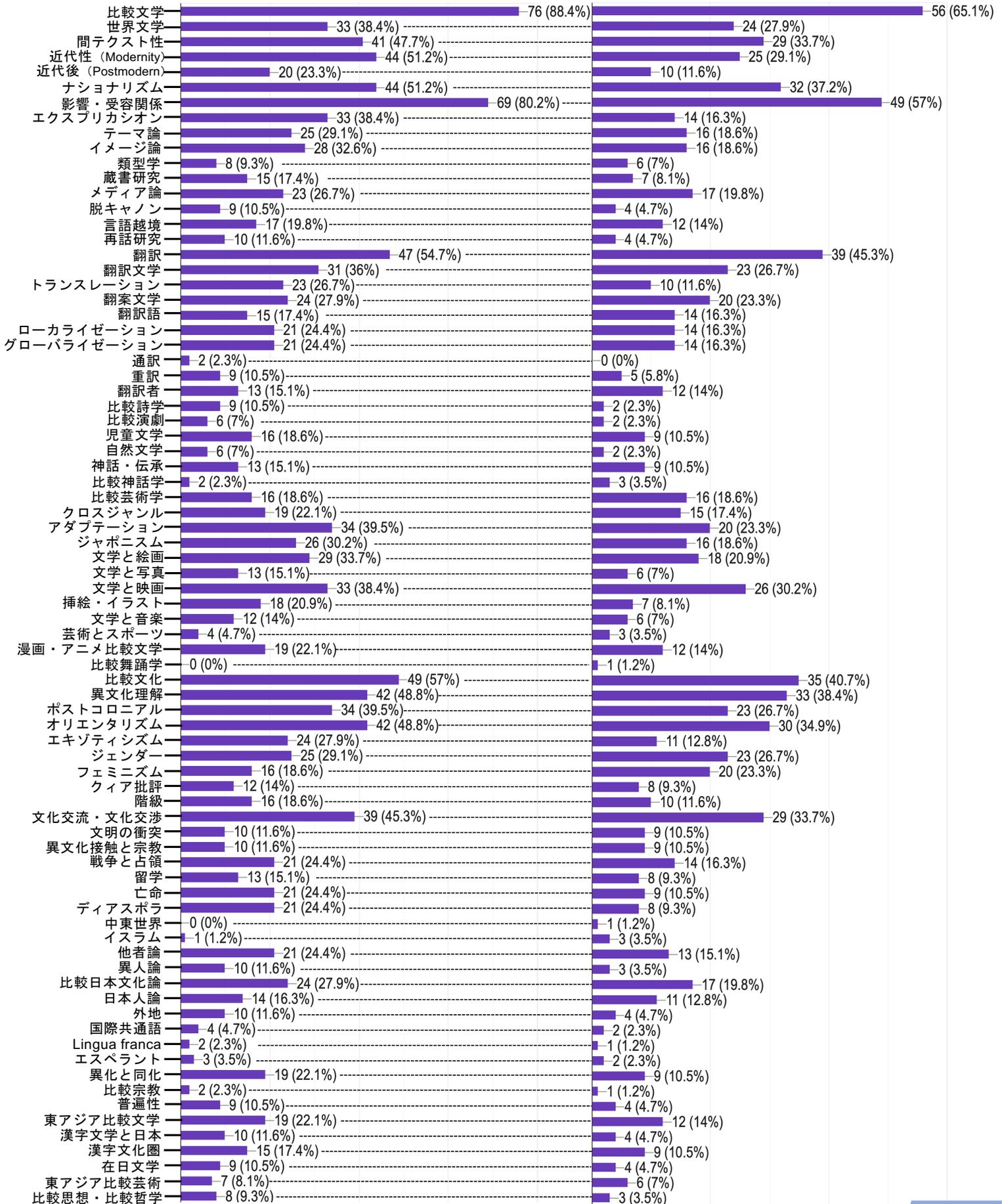
- 比較文学 比較芸術 比較文化 パリ神話 美術思想
- 翻訳、越境、亡命、二言語使用、世界文学
- 演劇 ラジオ 若者文学
- アメリカ文学 日米交渉史 文学とテクノロジー 児童文学
- 近代 日中比較 周作人 武田泰淳
- 女性 ジェンダー
- 詩学/古典/近代性/翻訳論/世界文学
- 日本近現代文学、文化誌、外地引揚文学、アジア表象
- 象徴主義
- セクシュアリティ
- 児童文学、労働者階級、移民、翻訳、受容
- 廉価版小説、タイム・ノヴェル
- 工芸、美術、茶の湯、比較文化史
- スベトラーナ・アレクシエーヴィチ、金子文子、石川啄木、チェルノブイリ、アイヌ
- 言語、風土、ポストコロニアリズム、風景の発見、異文化理解
- 比較美術史、芸術論、東洋美術史、芸術諸学、交流史
- カフカ、オリエンタリズム、ジェンダー論、メディア論、アルプスの少女ハイジ
- 寺山修司、現代日本文化、映像
- 翻訳、アダプテーション
- 中国人の日本観、黄遵憲、異文化理解
- 小説、核、植民地、戦争
- 多言語使用、人の移動、ポストコロニアル
- 日本古典文学、上代文学、古事記、日本書紀
- 翻訳
- 日本近代文学・映画・前衛芸術
- 他者表象、エキゾチシズム、女性表象、翻訳、翻案
- トラウマ 世界文学
- アジア系アメリカ文学
- 近代文学、世界文学、口承文学、古典、スコットランド
- 動物、環境表象、自然観、異文化遭遇、先住民
- 比較文学、比較文化、ロシア文学、ロシア文化、日本近現代文学
- 科学、ユートピアニズム、政治思想、文化
- 先住民、動植物、妖怪、神、環境
- 韓国、東アジア、文学、大衆文化、モダニズム
- 象徴、神秘、民族主義、モダニズム、境界
- 美術交流、近代、日中、中国美術、収蔵
- 日本近代文学 物語論 翻訳論
- ポール・ヴァレリー、ミラン・クンデラ、パトリック・モディアノ、翻訳、比較芸術論
- 自叙 民族 ロシア 日本 文学
- ナショナリズム 受容
- 比較文学、比較文化、比較文化史、文化交流史、文化史
- 放浪者、階級、移動、ジャンル文化史、ナショナル・アイデンティティ
- フランス近代文学、日本におけるフランス文学受容、日本人のフランス体験 両大戦間期のパリ
- 詩、小説、伝統音楽

【Q10】研究のキーワード（つづき）

- 非暴力、ポストコロニアル、西洋近代
- 翻訳 翻訳文学 イギリス文学
- 近現代文学、文化理論、芸術社会史、近現代思想
- ことば、映像、イメージ、視覚、音声
- 大衆向け印刷物 アイデンティティ 直民地体験 大衆文化 オラリティ
- オペラ共作、ヴァーグナー主義、比較芸術、ナショナル・アイデンティティ
- フランス美術 美術館
- ラフカディオ・ハーン、再話文学、民俗学、来日外国人、神道
- 美術史、科学史（博物学史）、比較日本文化論、比較芸術
- 文学、象徴主義、演劇、映画
- 近代文学 批評 宮沢賢治
- モダニズム 翻訳 伝統の構築
- 文化 文学 哲学 思想 夏目漱石
- サブカルチャー、オタク文化、SF、インターネット、映画
- 表象、人種、身体、舞踊、映画
- ナショナリズム 視覚 自然 野蛮 リアリズム
- 英文学 比較文学 比較文化 限界芸術 思想史
- 文化理論、メディア文化論、動物文化論、ジェンダー
- 比較文学比較文化、日中比較文学、日本近代文学、中国近代文学、台湾文学
- 近代、現代、中国、台湾、日本
- 神学、比較文明論、存在論、霊の現実と科学技術、.（芸術）
- 受容、影響、キャンノン形成、現代アメリカ南部文学、現代日本文学
- 日露比較文学、翻訳文学、収容所文学、世界文学、文芸メディア
- モダニズム、アヴァンギャルド、東アジア
- 漢文訓読・返り点・（漢文訓読の）送り仮名・漢詩・漢文
- ユーゴスラヴィア文学、東欧文学、世界文学、東欧地域研究
- 比較文化・思想、東アジア論、日中グローバル化比較
- ロシア 19世紀文学 日本近代文学 受容 ツルゲーネフ
- 探偵小説 大衆文学 大衆文化 民俗学 メディア論
- 日本文学、日本文化、映像文化、比較文学、メディア論
- 自然主義文学、テキストとイメージ、イラストレーション、人権問題、教育問題
- 泉鏡花、明治文学、幻想文学、写実、翻訳
- ナショナリズム、人種主義、記憶、ジェンダー、移民
- ロシア・ソ連児童文学、日露比較児童文学、日露比較文化
- 東アジア人文学、漢字圏、古典と近代
- オリエンタリズム、トゥーリズム、ジャポニスム、アダプテーション
- 日本近代文学、明治文学、夏目漱石、文学理論
- 比較文化論 モダニズム 異文化交流
- 比較芸術 比較文学 写真 映画 批評理論
- リービ英雄、越境、翻訳、多言語使用、言語的アイデンティティ
- 比較文学、比較詩学、近代日本精神史、ロマン主義研究
- 比較芸術、比較演劇、比較文学、比較文化、翻案研究

【Q11】 援用経験のある理論・概念

【Q24】 教育経験のある理論・概念



【Q13】開講科目名

- 比較文学
- 比較文学比較文化演習
- 比較文化論
- 比較文学論
- 比較文学研究
- 比較文学比較文化
- 比較文学特殊講義
- 英国若者文学論
- 社会関係論
- 日本比較文学概論
- 文学と言語学入門
- 文学概論
- なし（2022年度よりComparative Studies担当）
- 比較文学
- 比較生活文化史II
- ガストロノミ研究
- ドイツ文学講義
- 日本言語文化各論
- 文学概論
- 日本言語文化基礎講読
- イメージと文学
- サブカルチャー文学
- 現代文化論（イメージとメディア）
- 比較文学文化論
- 文学理論研究
- 人文・社会科学の基礎
- 学際研究I
- イメージと文化
- 比較文学特論
- 西欧文学
- 日本近現代文学研究
- 比較文学文化ゼミナールⅡ・Ⅲ
- 文芸・メディア・コミュニケーション論C
- 文化動態学特殊問題
- 比較社会文化論
- アジア比較文化論
- 文化・芸術分野方法論
- 地域文学文化基礎論I
- スラブ語学スラブ文学講義
- 文学
- 比較メディア
- 比較文学基幹演習
- 英文学特殊講義
- 英米文学の世界
- 日本・世界文学総論
- 全体主義文化論序説
- 比較文学・文化演習
- 日本・ラテンアメリカ比較文学
- 比較文学概論
- 美術論A
- 地域空間論
- 比較文化論（芸術）、
- 多文化交流史
- 日本文芸形成論特論
- 比較文学
- 比較文化
- 比較思想
- 異文化コミュニケーション（院講義）
- サブカルチャー論
- 映像と美術
- アニメーション・特撮文化論
- 国際表象文化研究
- 比較文学各論
- アート・プロデュース概論
- 日本文化
- 鲁迅と世界文学
- 比較文化論演習
- 表象文化論演習
- 東アジア地域研究
- 近現代文化演習
- 現代文化論A
- 比較文化演習
- 日露比較文化
- ポップカルチャー論
- 日本語日本文学演習
- 比較文学比較文化演習IV
- 比較文学・文化特殊研究②A（芸術と文学）
- 北米地域研究
- 翻訳とその諸問題
- 比較詩学
- 比較文学講義
- 国文学講読
- 英語圏文化特講Ⅰ（異文化交流理解研究）
- 比較芸術論
- 比較文化論基礎
- 日本文化第一演習
- 英米演劇研究Ⅱ

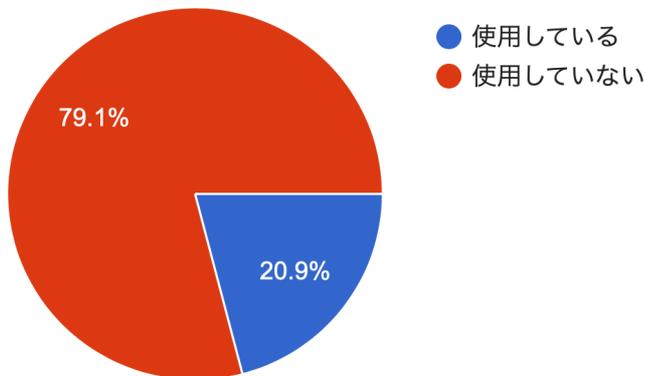
【Q15】授業題目（テーマ）

- 岩村透と比較理論
- 欧米の世界文学（研究）の概念を理解する
- イギリスが帝国主義から、第一次・第二次世界大戦を経て 福祉国家へと変化するなかで、どのように成長すべきか思案する若者たちの姿を文学に見る。
- 占領期日本におけるアメリカ
- 日中比較現代文化史
- ジェンダーと社会
- 前近代における文化交渉および国民国家の成立
- 日本近代文学と文化誌
- 日本近代詩とフランスの詩
- 現代文学理論
- N/A（2021年以前度担当科目無し。選択回答は2022年度のもの）
- 翻案
- 近代の日本の文化・生活のあり方を考える
- 日露比較文学
- 留学、異文化コミュニケーション
- 批評という文学的営為がどのように「食」を変えてきたのか。
- 日本におけるドイツ文学の翻訳史
- 戦後日本の映像メディアを用いた作品を中心に、映像とことばの関係を考える。
- 異文化接触、異文化理解
- 人物の異文化体験
- アウエルバツハ、ジェイムソン、サイードなどの著作を読む。
- 文字文芸の成立、近代文学の世界化、越境の文学
- 怪獣の文化学
- 文化から見た翻訳
- 映画を中心とした映像の技術史・表現史を、古今東西の作品を実見しながら学ぶ。原作となった文学にも言及する。
- 日本文学と翻訳
- 西欧文学受容を基盤にフィクション創造を試みた戦後作家の研究
- アジア系アメリカ文学作品を歴史的、文化的、言語的背景や影響を考慮にいれながら、読解する
- 日本近代における西洋文学の移入
- 英語文学の日本語訳と文化の翻訳
- 比較文学の歴史と理論
- デジタル・ヒューマニティーズ、ユートピア/ディストピア小説
- 遠藤周作『沈黙』について書かれた英文を読む
- 近年の東アジア地域の文化交流について、主に大衆文化をフィールドとして比較分析を行う
- 境界（者）の文学、文学の境界
- 日中間の美術交流、美術交渉にかかわる人物や事例を通じて比較芸術研究の方法論を紹介する。
- 永井荷風、翻訳
- フランス語圏の文学について、固有の風土や異文化との関わりを視野に入れ論じる。
- 近代以降のロシア文学・思想・文化概観
- 理系学生に向け、文学研究の方法や具体例を挙げて文学および文学研究に触れる機会を提供する
- 近代日中文学における他者表象
- マンガ、アニメーションを軸としたメディアの特性にまつわる比較文化研究
- フランス近代詩と日本におけるその受容
- 世界の詩を英語で読む

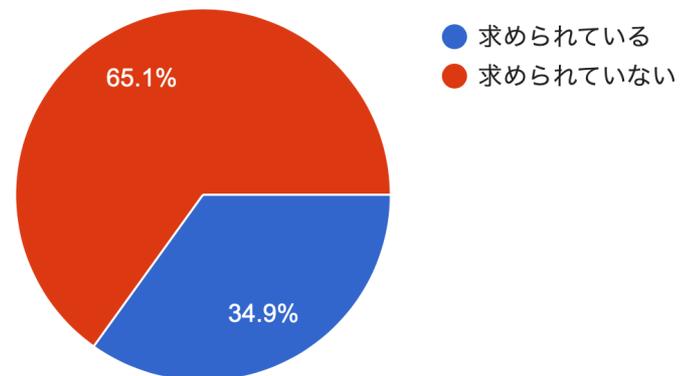
【Q15】授業題目（テーマ）（つづき）

- 文学理論への誘い
- オスカー・ワイルド『サロメ』を読む
- ファシストイタリア、ナチスドイツ、ソ連等に現れた国家統制的なプロパガンダ文化について、比較しながらその特徴と文化史的な位置づけを検討する。
- シェイクスピアの日本における受容
- 日本・中国とラテンアメリカの親孝行
- 比較文学の概説、方法論の例示
- フランス近代美術の概説
- 19世紀における外国人の日本観
- 「展覧会カタログ研究」
- 日仏文化交流
- 文学理論
- 翻訳理論と文学研究の交通
- 水の隠喩で語る（解釈する）文学・文化・絵画・哲学思想
- 日本のいわゆる「サブカルチャー」（オタクカルチャー）の歴史の概要を知る
- 日米における人種表象の比較
- 言語・国境を越えた文学文化作品の具体的な分析
- 比較文学研究入門
- アートとジェンダー、戦争とメディア、芸術と動物
- 西洋人の残した日本に関する記録を比較文化の観点から読む
- 魯迅と近現代日本・欧米文学との影響関係
- Yuval Noah Harari, Sapiens A Brief History of Humankind の批判的検討
- 英語圏の文学の翻訳/翻案
- 日本近現代文学のカルチュラル・リーディング
- 地域研究、異文化理解、文化研究
- 復文演習
- 世界文学論
- アジアの比較文化
- 二葉亭四迷によるツルゲーネフ受容と翻訳
- 第二次世界大戦と戦後日本のポップカルチャーの相関性、および戦争描写とポップカルチャー・テキストの関係についての比較文化研究
- メディアと文学
- フランス自然主義文学と社会運動
- 近代日本文学と絵画
- 近代アメリカにおける女性の経験
- 日本児童文学界におけるロシア・ソ連文学作品の翻訳・紹介の歴史
- 東アジアにおける伝統的エクリチュールとその多様な展開
- オリエンタリズム、トゥーリズムを中心とした日英比較文学
- 日本近代文学を多様な方法で読む
- 異文化理解
- 映画を中心としたアダプテーション論
- 近年の「越境文学」を軸とした比較文化論概要
- 国文学科所属の3年生のための比較文学を学ぶゼミ科目。クロスエリア研究、及び、クロスジャンル研究の方法を実践的に学ぶ。
- 英文学作品の翻案作品や翻訳について学ぶ。

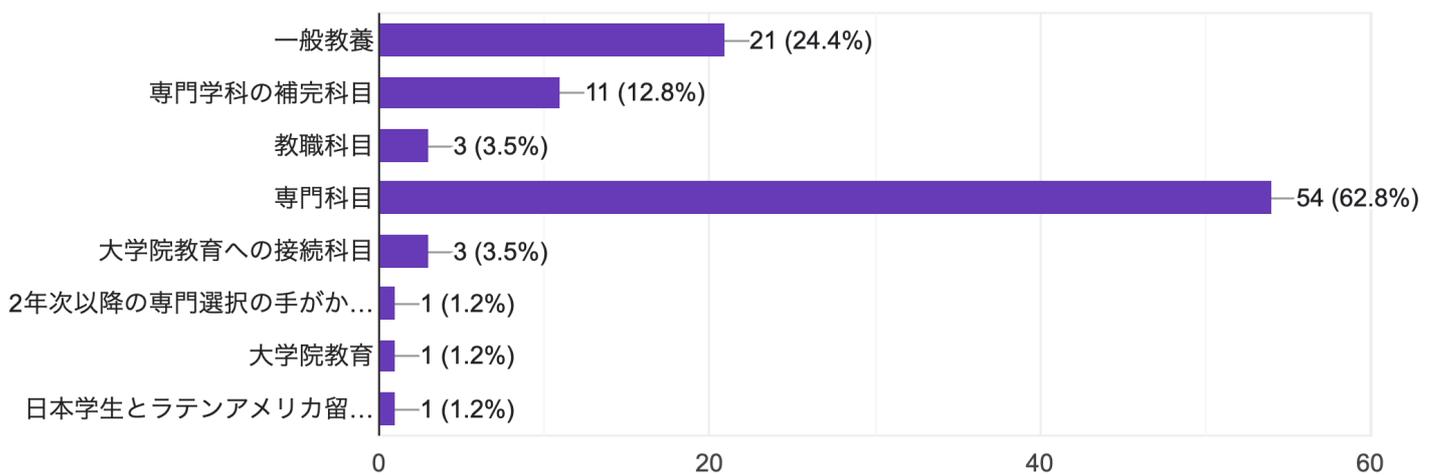
【Q19】教科書使用の有無



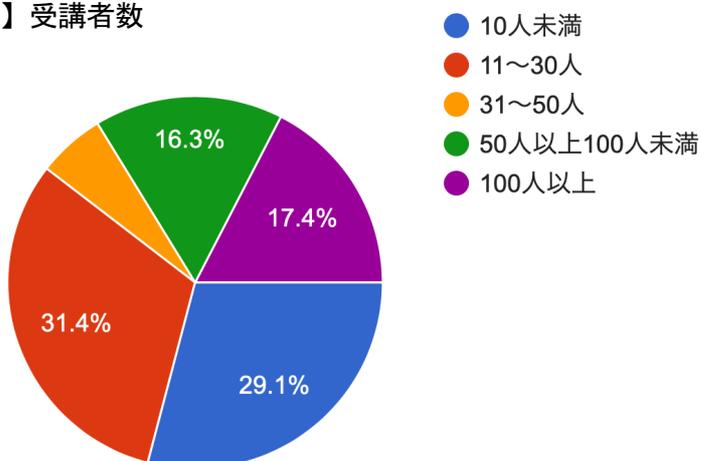
【Q22】受講者に求める外国語の有無



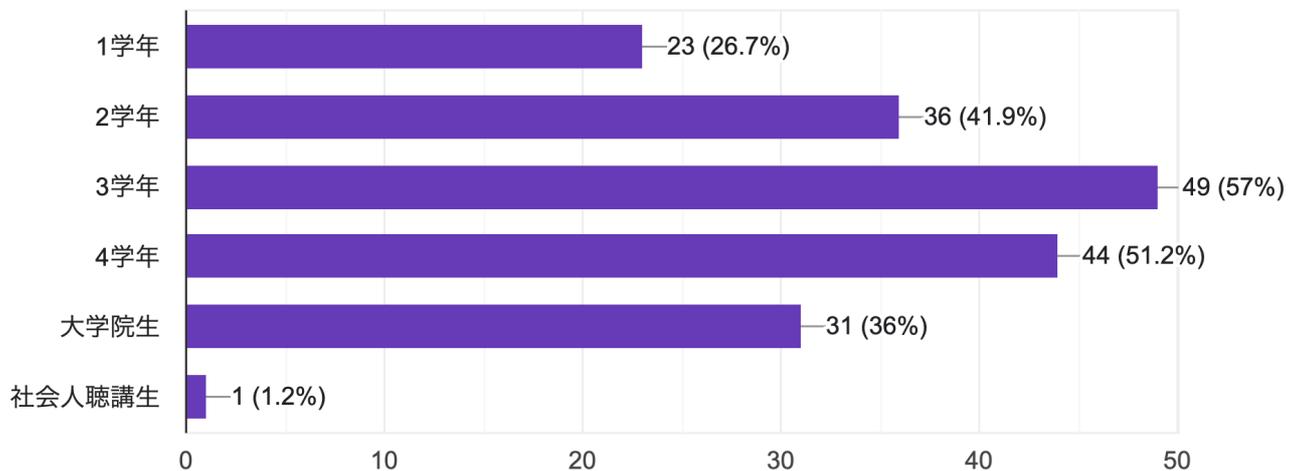
【Q21】科目が設置されている目的



【Q23】受講者数



【Q17】授業の配当年次



【Q19】使用教科書名

- 『世界文学とは何か？』（国書刊行会）『遠読』（みすず書房）
- 山本武利他編『占領期雑誌資料大系』＜文学編＞1巻～5巻（岩波書店、2009年）
- 『オリエンタリズム』平凡社
- 『比較文学考』白帝社
- エーリッヒ・アウエルバッハ『ミメシス』上・下巻（ちくま文庫）
- 『翻訳の授業 東京大学最終講義』（朝日新書）
- 島田謹二『日本における外国文学 比較文学研究』上巻（抜粋、コピー配布）
- The 101 Best Poems of All Time (Grand Central Publishing)
- 『展覧会カタログの愉しみ』東京大学出版会
- 『注文の多い料理店』
- Common Grounds (Princeton Univ Pr)
- 『魯迅と世界文学』東方書店
- Yuval Noah Harari, Sapiens A Brief History of Humankind
- 『文化のなかのテキスト』（双文社出版）
- 『これならわかる復文の要領』，出版社：新典社
- 『世界の文学、文学の世界』松籟社
- 岡本さえ編著『アジアの比較文化—名著改題』科学書院、2003
- 『緋文字』『ハックルベリー・フィンの冒険』『シスター・キャリー』

【Q25】科目履修者のニーズ

- 比較理論の知悉
- 受講人数が少なく、回答が難しい
- 若者への期待の歴史的変遷
- 日本におけるアメリカ文化の浸透の意味とその成り立ちを実際の資料を参照しつつ、歴史的観点から理解したい
- 専門的学術研究のスキル
- 比較文化的視点
- 文化交渉の歴史と理論、世界における「近代」の意味
- 学生の関心は、異文化交渉や伝統文化変容という視点から日本近代文学を捉えるところにあると感じられた。
また、漱石作品にみられる世紀末芸術の影響や、柳田國男と口承文芸など、各回のテーマに対する関心も高かった。
- 作品間の影響関係の実証性（説得性）の高めかた
- 韻文を翻訳する際、もとの詩形式をどのように（どの程度まで）保存すべきかという問題へのヒント
- 文学・文化への理解の向上
- 初回授業時アンケートによると、英語力向上（英語による講義のため）、取り扱う予定の小説・映画への興味が見られた。
- 発想の転換
- 近代の日本を中心とする歴史一般、および文化交流史
- （本大学では）一般的に情報が少なく、学ぶ機会がないロシアの文学や文化についての知識。
- 文学・文化に対する複眼的視野
- 食に関する知識一般。芸術と食、文学と食の関係。
- たとえば「アルプスの少女ハイジ」のように誰でも知っているキャラクターの背後に、どのような東西の文化交流があるのかをすることで、個々の作家や作品に関する知識にとどまらず、自分たちが住んでいる文化について新鮮な目で見るができるようになる点。
- 作家研究の方法、メディアミックスという現代的現象についての考察
- 新たな知識、ものの見方
- 異文化コミュニケーションの力
- 誰もが知るような批評家の文学理論を理解したいと考えているようです。
- 幅広い文学的素養と歴史認識につなげた文学作品の読み方
- 怪獣という対象を学問研究の素材とする方法
- 翻訳や多文化コミュニケーションに関しての理解を高めること
- 映像（動画）に囲まれているのが当たり前となった現在を歴史的に捉えること。様々な地域の様々な知識が合流して様々な表現が生まれているのを知ること。様々な映画を知ること。映像を分析する方法を身につけること。
- 日本文学の翻訳方法（留学生の多い授業であるため）
- 日本文学を世界的な視野で分析すること
- これまでアジア系アメリカ文学に触れてこなかった学生がほとんどなので、アジア系アメリカ文学とは何かについて学び、それを通してアメリカについての理解を深めたいという学生が多い。
- 日本近代の実際の学問・文学状況
- 翻訳自体を考える、という概念がつかみづらいので、まず見本となる考察や論考をいくつか見せる必要があるが、よいサンプルがなかなか見つからない。また翻訳前と後の変化を抽出し、そこにどのような意味や解釈を見出すか（文化や言語体系の違い、意味空化の違い、翻訳者の癖、etc）、翻訳が文学表現にどのような影響を及ぼしているか、という考察に持っていきたいのだが、学生は往々にして違いの指摘だけで終わってしまうので、そこから先の展開をどう伝えるかに苦労している。
- 各専門分野の基礎的知識、基本的な理論を習得し、自身の研究に結びつけること。

【Q25】科目履修者のニーズ（つづき）

- 近年の「韓流ブーム」「日流ブーム」「華流ブーム」などの東アジア地域内の相互文化交流の全体的な流れや理解
- 比較文学研究の方法に良く分からないながら憧れをもっており、体験してみようことを求めている。既存の日本近代文学史や日本史にはない概念や作品に触れて、新しい研究の方法を体験してみようことを求めている。
- 普段あまり接することのない中国絵画の見方、その背景を知る；日中比較芸術論の具体的なトピックを通じて比較文学比較文化研究の方法を知る。
- 文学研究の方法論
- 世界史の教科書などでは触れていても、深くは知らないフランス語圏の文学や文化について知りたいという意欲。フランス（語圏）が日本とどう違うのかに興味を持っている学生が多い。
- ロシア文学・文化の世界文学・文化の中での位置づけ、日本との比較考察
- 学生は二極化している。文学に触れた経験が少ない学生は基礎知識を得たり、よく知られた作品を読んだりすることを求めている。もともと文学が好きであったり、理論を学んだ事のある学生は、作品に接する新しい視点を求めている。
- なし
- エンターテインメント分野からどのように時代や文化を読み込むか
- 学生が求めているのは、結局のところ、「文学で遊ぶこと」だろう。フランスの詩（ボードレール、ランボー、アポリネール、コクトー、デスノス等）の原文講読自体を楽しんでいる学生が多い。また、様々な日本語訳を比較検討することに興味を抱く学生もいる。なお、うちの学部の教員の中に日本近代文学の専門家がないため、この比較文学の授業が日本近代文学に関心を持つ学生の受け皿になっているふしもある。（もともと、フランス語能力を要求しているため、日本近代文学に関心があってもこの授業を受講できない学生もいる。）
- ふだん読むことのない詩一般に親しんでみたいということ。詩は小説よりも短いので英語で読むことに挑戦したいということ。
- 学生は文学部で理論を学ぶとは思ってもいなかったようで、見当はずれではありますが、彼らにとっては目新しいようです。
- 様々な文学作品に触れること、自分が気づかなかった作品の読み方を知ること、教員や他の学生たちがどのように作品を読むのかを知ること、文学作品から派生する、人との様々な対話。
- 昨今の権威主義的政治文化の世界的広がりのなかで、プロパガンダ・動員的な文化・芸術の歴史と特質についての関心は高まっているが、このテーマを正面から取り上げている授業は極めて少ない。また、こうした大衆的プロパガンダは、今日の世界的なサブカル・大衆文化の広がりや、その政治的・商業的利用とも無関係ではなく、受講する学生たちにとって大きなアクチュアリティを持っているようである。
- シェイクスピアに対する関心
- Students from the Spanish Department appreciate this class because they are able to interact with foreign students from Latin America or Spain and share with them a unique experience which consists of using Comparative Literature as a way to understand each other. Foreign students too enjoy this class very much as there are not so many chances for them to learn about Japan in a friendly relaxed atmosphere. Specially, by listening the Japanese students' opinions on matters like parenthood, moral attitudes, etc. All students understand, the oya-koko stories are old fashioned but they get a chance to learn about Asian traditional cultural values and realize Latin America and Asia have big differences.
- 日本語日本文学科の学生が日本文学と外国の文学・文化・芸術との関係を分析するメリットを知り、視野を広げようことを求めている
- 多くの作品や場所を見る経験
- 世界のなかにおける“日本“の位置付け、意味
- 「クロスエリア」以上に「クロスジャンル」に関する方法論を学ぼうとする姿勢が見られる。
- 多文化理解の重要性
- 多様な見方

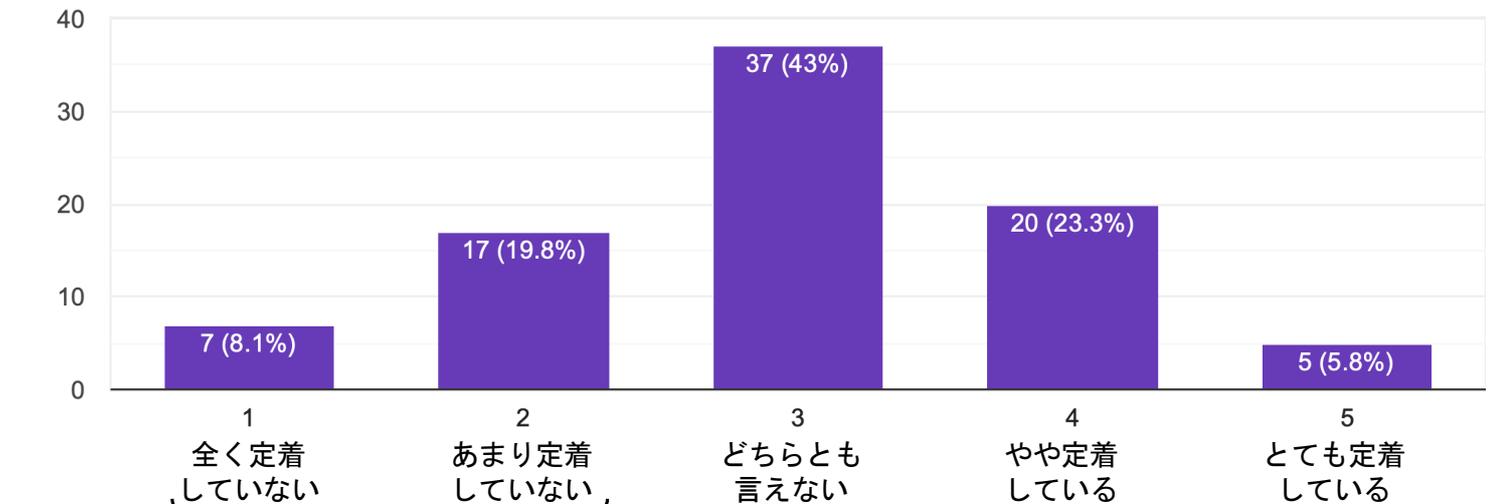
【Q25】科目履修者のニーズ（つづき）

- 文学研究に関する理論的な知見と、それを応用する実践的方法を学ぶこと。
- 理系とは異なる自由な思考力、想像力をもって灰色な日常を色彩豊かに感じられるようになったこと
- 中国からの留学生は、日本のサブカルチャーを深く知ることを求めているように思われる。日本人学生は、単に自分が好きなものを扱われているから好き、程度のように見える。けれども、理論や意味、歴史、背景などを知っていくと、興味を持っていく学生も多い。
- 異文化理解
- 日本やアメリカに限定されない広い文化的な影響関係を、その現代日本文化との関係において理解すること。
- 文学や映画に娯楽として接するのではなく、分析して研究するという作業の実態を知りたい学生が一定数いるようで、毎年学期末レポートに力作が散見される。
- アーティスト、キュレーター希望の学生が多いので、自身の活動、制作テーマのなかでアクティブに響くものを求めているように感じる
- 日本が過去にどのように論じられてきたかを知ること、日本を捉え直す
- 第三国を補助線とする近現代日中文化関係
- 文明以前の時代から、全人類規模で、文明のあり方を理解しようとしている意欲的な研究に接する。広がり大きな現実を対象とする考察の実例に接して、その有用性と限界について考える。
- 翻訳という行為、翻訳テキストというものに対する深い理解
- 外国人留学生は主に文学テキストの読解方法や基礎的な文学理論、専門用語の習得、日本語運用能力の向上を期待しているようです。日本人学生は、各国文学の枠を超えた広い視野での文学の読解力や文学理論の理解力の涵養を求めているようです。
- 東アジア地域内の文化に対する相互理解とともに、グローバル化下における東アジア文化の位置づけに関心があると感じる。
- 漢文（古典中国語）に関する文法的知識・理解
- 漢文訓読に由来する日本語表現の知識・理解
- 漢文訓読に用いられる文語および文語文法の知識・理解
- 教職（国語科教員）採用試験に向けての漢文力の養成 ◇将来の教職（国語科教員）を念頭に置いての漢文力の養成
- 自分一人ではたどり着かない地平を授業を通して見渡せるようになること
- 文化理解と共生の関係の把握
- 日露間の文化交流と、その結果生じた影響を具体的に知ること、自らの研究テーマを深めること
- 戦後から現代に続くポップカルチャー・コンテンツの大系史の理解。比較文化の視点から見えてくる異文化交流の限界と発展。メディアの変遷に伴う神話の再話方法の変化。
- 研究者として専門性
- 作家・芸術家の社会参加
- 幅広い教養、知的な刺激、比較の視座（何と何を比較しうるのかという発想の基盤）を設けるための手法や知識
- 外国文化を理解するための基礎知識と柔軟な視野の習得、人種問題への歴史的な理解
- 「翻訳とは何か」という根源的な問いを多角的に捉えたい学生が、他ではあまり論じられないことのない「日本の児童文学界における翻訳」の状況を知るために当該科目を履修しているケースが多い。
- 東アジアにおける伝統と近代の関係をどのようにとらえたらよいのかという分析方法の習得、とりわけ近代以降の表現の多様性と伝統エクリチュールとの関係をときほぐす視点に関心があるようです。
- 学際的な作品研究
- そもそも日常的に文学作品に触れている学生が少なく、受講生は文学作品を読む上での基礎的な読解力を身に付けることを求めている。

【Q25】科目履修者のニーズ（つづき）

- 異文化理解に関する基本的知識と知見など。文学研究科に所属している学生なので、修士論文担当の先生の指示を受けて受講している印象が強いです。関心がないわけでは勿論ないのですが、強い興味をもって臨むというよりは、他研究科の教師による授業であることもあって、どんな様子の授業になるのか見当もつかず、手探り状態で受講してくる感じです。
- 国際系の学部なので、首都圏の私大の（文化系中心の）国際系学部と併願して入学してくる学生が多いが、本学部は教員も開講科目も途上国を対象とした開発学が中心で、「なんとなく文化やアートを勉強してみたい」という学生は欲求不満があり、それを解消すべく集まったという感じだった。他学部からの受講者は、文学に興味があるとか、映画に興味があるといった、具体的な関心に基づいて履修しているように見えた。
- 複数の固有の文化（日本文化と外国文化）、またはそれらの文化に属する作品・事象を同時に捉える際に生じる問題に対する理解。
- グローバル化をはじめ、近年の社会的変化に伴う文化の変容に対する理解。また、そうした状況における日本の事情に対する理解。3) 上記の問題について考察を行い、論述を行う能力の育成。
- 日本文学と外国文学との関わり、文学作品の映画化の問題などの研究を行いたい学生が履修する。
- 英語で執筆された演劇作品について実践的に学ぶこと。英語での多様な表現力を高めること。翻訳（英文和訳）について実践的に学ぶこと。
- 従来の一国文学(研究)には収まらない「国、ジャンル、学術分野」の越境、クロスオーバーの必要と面白さ
- 英文を読むこと（英文テキストの読解、原作と英語訳の比較）
- 映画鑑賞（原作小説と映像の比較）
- 文化交流史（日本のキリスト教文化）を学ぶこと

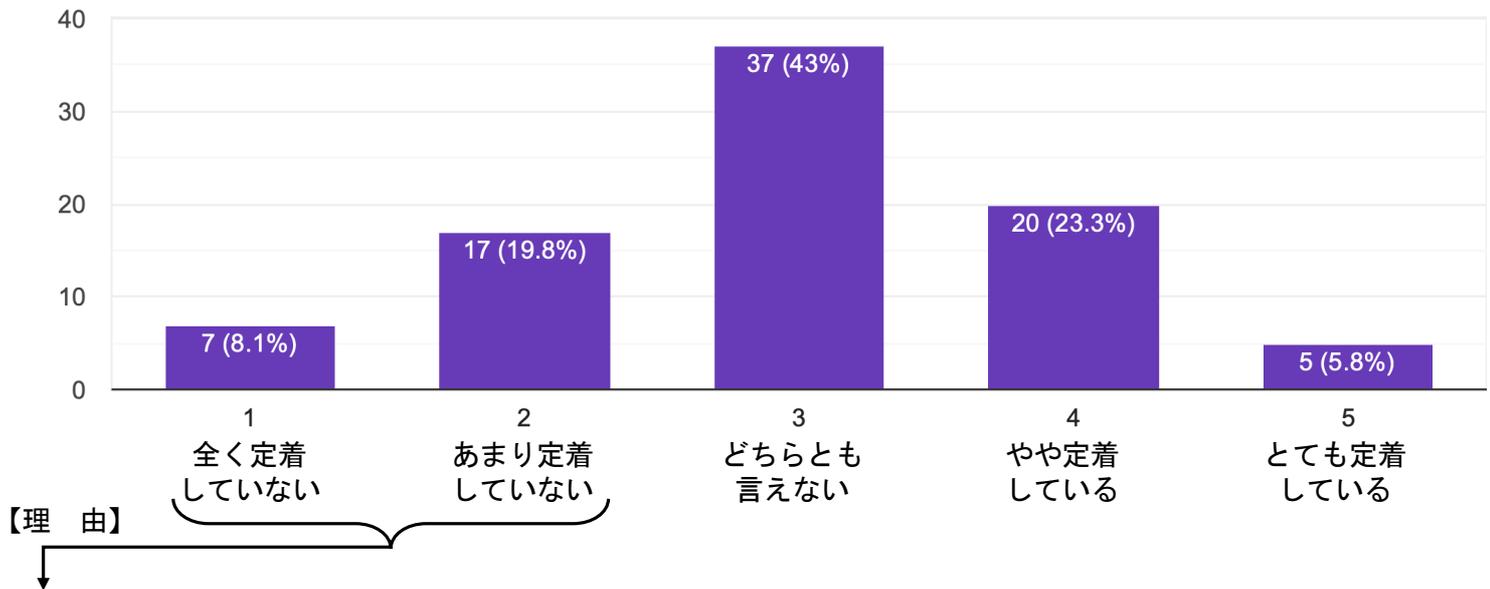
【Q27】大学における比較文学比較文化教育の定着度



【理由】

- 指導できる教員が減っている
- 大学院に進学する学生が少ないため
- そもそも前提となる各国文学について教えることが困難な状況にある。
- 各国文学や文化を専門としても、複数の国の文学や文化を講ずることができる教員が少ない。
- 学生の要望は結構強いと感じます（とりわけ大学院にて）。だが、比較文学比較文化の存在が大学側に認識されていないという印象を受けます。とりわけ、理事や部長クラス以上の事務関係の方々に。
- 個人の裁量として比較文学比較文化に関わる内容を授業で扱うことはできるのですが、大学のディシプリンとして制度化されているわけではないので、たとえば自分の後任の人が比較文学比較文化に関わるテーマで研究をしてくれるのかと言え、必ずしもそうではないと思われま。
- 3を選びましたが、危ういと思っています。「比較」だとカバー範囲が広いという理由で使用している（ように見える）場合が多いように思います。
- 「比較文学」を「世界文学」に変えようという動きはかなくはないが、現状では「比較文学」のまま。言語別の「文学史」科目を補完する「総合的な文学史」の必要性はいまだ認識されている。
- 所属部局のコース設計や科目設定において、そもそも比較文学比較文化がまったく意識されていない。比較文学比較文化を専門的に学び、研究している教員が科目を担当していない。各国文学の研究者が大学院生や受講生のニーズに合わせる形で「片手間」で科目を担当しているにすぎない。
- 学生は在籍（所属）している学科、コースが要求するカリキュラム（卒業所要単位）履修をこなさねばならず、その学科の理念、教育目標、構成教員の専攻分野、またカリキュラム構成が旧態依然のままだから。
- 比較文学、比較文化の名称を持つ学科・専攻が存在しない。
- 比較文学、比較文化の任用人事が行われていない。
- 「プロパー」という考え方が根強い。（例えば日本文学専攻で「日本文学・文化」という任用人事が行われるとき、選考委員（日本文学専攻以外の文学部教員から投票により選出）には日本文学・文化を専門領域とする比較文学比較文化研究者ではなく、英文学、中国文学等の各国文学研究者が選出される。）
- 学科やコースとしては存在しておらず、文学部文化構想学の中のアジア文化コースや表現文化コースに所属する「比較」研究をする教員が、それぞれバラバラに自分自身の研究を講義しているような状況のため。学生にとって、理論の定着や相対的な把握がしにくい状況に思える。
- 自分が所属している理工系大学の大学院の教育体系では、現状として学生がテーマの近い教員の研究室で指導を受け、修士・博士論文を書くことを通じて、各分野の方法論について学んでいます。研究室のゼミ以外で授業科目として比較文学比較文化という学問の訓練を受ける場が極めて少ないからです。
- 所属先大学においては分野の縦割りの弊害。横断型研究にまつわる場が用意されていない。

【Q27】大学における比較文学比較文化教育の定着度（つづき）



- 「比較文学」に限らず、「文学（部）教育」が危うい状況にあると考えています。私立の中堅校文学部学生のほとんどは、文学に興味・関心があって進学してきたわけではないというのが現状です。「活字を読まない」という学生が多く、まずはそこから始めねばなりません。
- 自分の大学のことに限定して回答していますが、文学研究に対する理解がありません。文学の授業自体が縮小傾向ですし、英米文学、日本文学、といった紋切り型のものを教職課程のために置いている、といった程度の認識に留まっていると思います。人文学の分野でなければ、比較文学の具体的なイメージを持っている教員が少ないため、新規の科目開講などはほぼできません。
- 比較という方法の到着点が曖昧。影響関係であれば各領域で成立している。
- 英文学やアメリカ文学の講義科目と二枚看板にして、実質的には英米文学の授業が行われていることがある。英米文学の研究者の一部には、比較文学ぐらいできるだろう、という考え方が根強い。
- さまざまな言語の習得が必要だが、若い学生には、十分なレベルに達するのは至難。世界規模で、さまざまな文明・文化のあり方を「肌で感じる」ようであればならない。世界的視野をもつことが必須だが、至難。また、まずは、何らかの専門領域についてしっかりした理解がなければならないが、そのような見識をもつことはきわめて稀有。
- プログラム改変をしており、「比較・・・」の授業が減るため。
- そもそも科目名じたいに、比較文学や比較文化の名称が入らない。
- 学力水準の低い大学では、学生に外国語力を期待することには無理がある。
- 全員が履修しているはずの英語でも、中学生用の副読本すら理解できない学力水準とあっては、たとえば『論語』の英訳を示して漢文訓読に関する説明を補強することも不可能である。外国語を排除しての比較文学比較文化教育は、教員の自己満足に終わる危険性が高く、とうてい「定着している」とは言えない。
- 外国文化そのものへの関心の低下、YouTubeその他で取得する表面的な情報で満足する学生の現状
- 比較文学比較文化的な研究方法が独立した研究方法というよりも、あくまでも各言語の文学研究を補完・補助する方法として理解されているからではないか
- Q25の回答に書いたとおりです。
- そもそもカリキュラムを策定する教員の側に、「比較文化」というものに対する理解がない。本学部は国際系（文系）でありながら教員の半数は理工系であり、しかも現在の理工系の研究者は、学生時代に教養教育を受けていないことが珍しくなくなっている。
- 専門教育において比較文学比較文化を打ち出したり、カリキュラム改革等で比較文学比較文化科目を増設しようとしたとしても、余り理解が得られないことが度々あったため。

【Q28】比較教育における工夫

- 受講者の関心にあわせてレポートを書くことを許可する
- 現在比較文学に関する授業は担当していません。
- 複眼的視点。実証性の重視。外国語能力。
- 専門的な探求に没頭しすぎないように
- 比較文化的視点を含めたジェンダー研究
- 前近代の各文化の特徴と近代以降の変遷を地図等を利用して「近代とは何か」を説明する。
- 授業内容でいえば、工夫というよりも基本的な立場である。今日、日本近代文学を授業で講じる場合、比較文学比較文化の視点はとらざるをえない立場だと考えている。また、授業教材での工夫としては、映像・画像・挿絵等のデジタル・コンテンツの活用である。
- 明治以降の日本近代文学の研究には外国文学の知識が重要であることを強調している。
- 対話型授業
- 受講生は通常比較文学比較文化に関する知識が全く無いため、基礎的なことから教えるようにしている。
- 受講者の外国語の能力や知識のばらつきへの対応
- テキストを解釈する際、複数のコンテキストを参照すること
- 日露を対象とした講座であるが、米や独、韓などの作品も取り入れ、幅広く論じている。また、できるだけ、新しい作品を取り上げるようにしている。
- 時代との照合や地政学的視点を導入して、文学者が活躍した背景、環境を理解するのに役立てること。
- 学生にとって身近な事象からスタートすることです。
- ディズニーや日本製アニメなど、おそらく学生さんたちが（程度の差はあれ）知っているであろう作品を積極的に取り上げ、その背景にあるものを深く掘り下げるように努めています。
- テキストをしっかり読むこと。テキストに根ざすこと。
- 固定された知識としてではなく、生身の人間の息づかいが感じ取れるように心がけている。
- 異文化の魅力、比較の有効性、他者理解の重要性を示し、これを納得してもらうこと。
- 大学院では留学生が多いので、アウエルバッハが（実際には川村・篠田の翻訳ですが）「現実」と書いているときに、中国や台湾ではこの言葉がどういう意味を持っているのか、学生と情報を交換し合っています。
- 西洋と東欧、北半球と南半球、先進地域と途上地域、語圏のあいだのバランスを可能なかぎり保つようにしている。
- 漢文を用いることが多いので、学生の理解を助けるよう読み下しを作成するようにしています。
- 比較文学比較文化教育になると、英一日のコンビネーションが多く取り上げられますが、私の授業では英語圏以外の例などを使うこと心がけています。
- 国という単位（特に「日本」）で考えを閉ざさないよう、日本文学や日本映画であっても「世界の中の文学・映画である」という観点をなおざりにしないよう、うながしている。
- 学部の授業の場合には、広く興味を持ってもらえるよう、さまざまなトピックを取り上げること。
- 日本文学専攻の院生にも外国語・外国文学やそれと日本との関係に目を向けられるようにしている。
- アジア系アメリカ文学の授業では、様々な文化的歴史的背景を反映した物語に触れるため、他のアジア系アメリカ文学との比較を行いながら、それぞれの作品の共通するテーマまたは特徴を把握するための作業を行って、理解を促しています。
- もはや「比較」の時代は終わったと思われるため、「浸透しあう文学や文化」を教えること。
- 比較、という言葉に引きずられて、外国のものと日本のものを二つ並べて比べればどうにかなる、と誤解している学生が大変多く、そこをまず否定するところから始める必要がある。比較というより、越境、境界、関係性、というキーワードであり、外国と比べるということにとどまらず、外国とはそもそも何かを問う、ジャンルとは何かを問う、といった、枠組みを問う運動でもあることを、折に触れ伝えるようにしている。オープンキャンパスなどで行う講義では、比較文学について誤解していた、という声がアンケートでも多くあり、一定の成果はあると感じる。

【Q28】比較教育における工夫（つづき）

- 学部生の場合、受講生にとって身近な話題や事例（現代の社会問題・国際問題・文化の問題など）に寄せて導入するようにしている。大学院生の場合もいきなり理論書や『講座比較文学』を講読させるのではなく、先人の比較文学研究の経験や異文化理解の体験を事例に挙げて導入を行っている。また所属部局のコース設計上、日本語のみ、もしくは英語と日本語を使用言語・使用テキストとし、その他の言語を習得していなくても授業を理解できるようにしている（便宜上、そうせざるを得ないのが辛いところ）。
- 文学研究の危機の根拠を提示し、文学研究が社会的意義を持ち、社会的貢献の可能性のあることを比較文学・文化の視点や考え方から示せるように努めている
- 映画・アニメ鑑賞の時間を設ける。
- 展覧会の図録（図版、日本語・英語の解説文）を用いる。
- 「韓流」「日流」「華流」のバランスをとった全体的な理解をしたいと考えている
- 様々な研究対象やフィールドや研究角度が存在することを紹介するようにしている。また現代社会理解とも繋がる先端的な研究でありうること、テーマに応じて新しい方法論や角度を開拓できる分野であることを説明するようにしている。
- とくに留学生に対して、「比較」の意味についてよく考えさせること。研究テーマを設定する段階で「比較する」ことは目的ではなく方法であることを強調し、気付かせること。
- 具体例を通じて説明すること。
- 話題を広くとること。
- 選りすぐりのテキストを必ず示し、朗読の時間を設けるようにしている。ネイティブ話者が入る場合には、その人に朗読してもらっている。留学や渡航時の体験についても話すようにしている。
- 「国民文学」や「ナショナリズム」が異文化接触・受容・アダプテーションの産物であること
- 自分の得意分野に偏らず、広く普遍的な知識を提供すること
- 学生が興味を持つトピックスを取り上げること。
- 一つの軸足を定めること。その軸となる分野を歴史的に捉える視座をもつこと。
- 翻訳によって外国の文学作品を読むことの価値を否定しないこと。（大学院に進学し、将来、文学研究者になることを望む学生がほとんどいない、という学部状況を踏まえた判断。）
- 比較文学系の授業ではない授業（英米文学、日本文学、ドイツ文学、フランス文学、西洋史、哲学思想論などの概論、演習、特論）との連携。（学部内に比較文学の授業を担当する教員がごく僅かしかいないため、それ以外の授業との連携が欠かせない。ただし、実際にはそれほど順調に連携が進んでいるわけではなく、これはむしろ今後の課題である。）
- 「世界文学とは翻訳によって豊かになるものだ」というD・ダムロッシュの意見に賛同して、文学作品をしばしば複数の英語版と日本語版を対照しながら読んでみると、翻訳のブレの中からテキストのエッセンスが浮かび上がってくるように思えるときがある。
- 「学問」を開始するまでの導入部分に時間をかけています。スタートレベルをかなり下げ、「読み」を学ぶのに、小学校の国語の教科書にある物語を使っています。（2年生担当です）そこから、テキストの幅を広げ、歌謡曲からアニメ、漫画といったテキストを扱い、「面白そうだ」と思った学生が本格的な学びを開始するといった感じになっています。
- 工夫していると言えるようなことではないですが、「文学」という言葉に難解なイメージを持つ学生が多いので、まず文学は楽しむもの、難しくないものというスタンスで、興味を持ってもらえそうな話し方や話題、比較対象の作品などを考えています。
- つねに比較における類似点と相違点の両方に注意し、あわせてその原因・理由を追究すること、また「比較文学」や「世界文学」自体が普遍的なものではなく、「国民文学」と表裏一体をなした近代的国民国家やブルジョワ市民社会を下支えする、特定の歴史的時代の概念に過ぎないことを学生によく理解させる。
- 発想の大切さ

【Q28】比較教育における工夫（つづき）

- No matter if I teach Comparative Literature or not, I always try to insist on differences between Latin America and Japan as I believe in a globalized world people tend more and more to forget about their differences and evaluate as positive their ability to mix and adapt. Flexibility is a good thing but not when without noticing it one is being colonized.
- 外国語が読めない学生が多いために、外国語を使わない範囲で授業をデザインしないといけないため比較芸術論の役割が大きくなっている
- いろいろな作例や事例を紹介しているつもりである。
- 日本人としての視点をもつことを考えさせる。
- 履修する学生の多くが日本文化学科に所属している学生なので、クロスジャンルのにもクロスエリア的にも、「日本」を基軸とした学びとなるように考えている。
- あまり専門的でマイナーな対象を講義内容とはしない。
- 文学や文化への関心を持ってもらうこと
- 日本文学を専攻する学生が対象のため、比較文学研究の視点が持つ意義・射程をなるべく柔軟に伝えることを心掛けている。
- 自己形成における国・民族・性差といった境界を超越した視野の広さ、深さをめざした教育
- 身近な経験などを例に出し、実感を伴って理解できるようにしたり、学生が親しんでいる作品などを例に使うことで議論を展開していくようにしている。
- 国や民族などでの相違を強調するなど。
- 特定の地域・言語に偏らないよう、細かく論じる力がない文化についてもできるだけ広く情報を提供するよう心がけている。
- 具体的な研究事例を通して研究方法と手順を示し、教員自身の試行錯誤体験を語る。
- ジャンル横断、メディア横断的に多くの事例を提示しながら、今を生きる私たちにとってアクチュアルな問題として受け止めてもらうようにしている。
- 視角の異なる様々な資料を提供し、自然と複眼的な思考が養われるように、と考えています。
- パワーポイントによる書籍カバー・作品の舞台・挿絵など図版の紹介
- 人類にはさまざまな文明・文化の流れがあることを忘れない。西洋の最新トレンドを勉強して紹介すればよいというような態度は、学問になっていない。また、西洋でなければ「東洋」と言って、それで適切な区分になっているというような不適切で雑駁な考えしかないのでは絶望的。
- 外国語のテキスト、文学テキストを使用すると受講者が減る傾向があるので、日本文学を絡めたり、翻訳を使用したり、文学以外のメディアも多く取り上げるようにしている。
- 日本近現代の文学を素材にする場合、受講者の関心に合わせて作品を選ぶように心がけています（東アジアの留学生が多い→外地の日本語文学等）。比較文学の初心者にも理解できるよう、基礎的な理論や概念について解説や参考図書を紹介を加えるようにしています。また、外国文学や外国の状況を夫々の学生から教わるような雰囲気の中で議論することで、参加者が多角的に文学を考えられるよう意識しています。
- K-POPなどの親しみやすい話題から始めて、最終的に文学へと話題を変えていく。
- 漢文（古典中国語）を訓読する行為それ自体、日中対照言語学の色が濃厚である。したがって、常に日本語との対比を示しつつ漢文の文法その他を説明している。ただし、上記【危ぶまれている理由】の回答に記したごとく、英訳などを示して、いっそう漢文の文法その他の特徴を際立たせて説明することができない。この点に関しては、どうしても教員として自ら限界を設定せざるを得ず、日ごろ甚だ遺憾に感じている。
- 現代的な作品、現象を積極的に扱う
- 自分の異文化体験を聞かせること
- ロシア文学を知ったことで日本文学が変容したダイナミズムを伝え、現代にまでその影響が残っていることをしる楽しみを味わうこと、生きた人間の活動と密接に結びついた文学の息遣いを感じることを、文学研究の面白さにふれること

【Q28】比較教育における工夫（つづき）

- 常に学際的研究姿勢を示し、文化研究・文学研究の方法に人文地理学・歴史社会学の理論を取り込んで、学生が分析対象の作品・テキストを立体的・多面的に体感できるように工夫している。
- 研究方法の習得
- 従来の学問の体系が専門化・細分化されていることの指摘。
- 視覚資料の提示、文学テキストの丁寧な読解、比較対象を設定することの必然性や有効性を説明すること
- 図像テキストを含めた資料の多様性
- 外国語を含む関連資料をできるだけたくさん提示している。また、多様な研究方法を紹介するように心掛けている。
- 受講生の意識が即自的な文化論に陥らないよう、複数の分析方法を明示し、また、多様な視点からの分析が有効であることを伝えるようにしています。
- 意識しないまま身に着けている比較文学的方法に気づかせ、洗練させることと、そのような方法が自身の関心や専門分野の研究にとって必要で有用なことを実感させることを心掛けています。
- 映像を用いるなど、文字を補う資料を用いること
- 先ほども申し上げたように、「比較すること」の意義について、大学院・学部を問わず、訴えることにしています。工夫と言えるかどうかははっきりしませんが、とにかく、彼らが関心を持つ分野に接近することで、如何にその意義を実感させるかだと考えています。そのためには、彼らの関心を私自身の関心に如何に引き寄せられるかだと思っていて、とにかく統合と差異化による、いわば「比較実践」を心がけています。また、学部教育に限った話ですが、社会学系領域への関心が比較的強いので、いわゆる「芸術・文化」領域に属する関心との橋渡し役になればと思い、2年次から動画づくりを推奨しています。その作り込みに、如何に文学的・映画のノウハウを実践的に伝えられるか、ですが、研究としての成果にはなかなか結びつきません。「書くこと」も同様に捉えられないかと、一応試してはいるのですが、結果にはさらに遠い印象です。
- なるべく受講のハードルを低くする。いっぽうで、扱う題材は学生の興味関心にかかわらず、自分が本当に面白いと思う作品しか取り上げない。教員（中年男性）が「学生が好きそうな題材」を考えて選ぶと、だいたい「寒い」ことになるので。
- 比較文学比較文化において、固有の二つ以上の現象・存在を比較することになるが、どこからその作業を行っているかということが非常に重要であると考えます。その重要性に対する理解を促し、学生がその一方（「日本」）と自分を完全に同一化せず、自らの立脚点を反省的に考察する姿勢を促しました。また、その一環として、リアクションペーパーやエッセイ課題を通じて把握した学生の意見や関心を授業内容に反映させるよう努めました。
- 本務校の国文学科の学生に外国語文献の読み解きを求めることは難しいので、原典主義は採らず、既存の翻訳を用いて比較文学的研究を行うことを認めている。
- 演習を通して学生達が具体的・実践的に学べるようにすること。学生達が多角的な視点から理解を深められるようにすること。研究を深められるよう、卒業研究と繋げる視点を提供したり、関連文献や資料収集の方法等について具体的に示したりすること。

【Q29】比較文学比較文化関連教科書に対する要望

- ニュークリからディコンストラクションに至るような批評理論の解説書の類いは多いので、「実証性」という観点を重視した比較文学研究の入門的な解説書があると良い。
- まだ比較文学の講義を開講していないので、比較文化についてはいえば、近代と前近代とのそれぞれの比較文化的課題を整理した、学部生も理解できる教科書が欲しい。
- 担当教員によって、授業内容は多岐にわたるので、教科書というよりも、ハンドブックのようなものが求められるのではないだろうか。
- 外国文学の断片の対訳を掲載した教科書
- 比較文学比較文化の広範な領域を体系的にまとめたわかりやすい入門書。
- 比較文学の歴史について
- テーマ・ジャンル毎に、どのような時代区分と地域区分がなされているかを概観する内容
- 比較文学・文化を学ぶ際に使える基本となるテキスト。様々な例は載っているが、論文を集めたものではないもの。
- 文学理論と研究論を導入する教科書があったらと考える。
- フード・スタディーズ的な教科書です。食文化を人文学的に考えるためのツールが欲しいと思っています。
- 情報が載っているだけでなく、（最低サンプル程度でも）実際に文学テキストが掲載されていると使いやすい気がします。その意味で、一昨年度教科書指定した『世界文学アンソロジー いまからはじめる』（三省堂）はかなり良かったと思っています。
- 比較文学の学問的な歴史や教科書（的なもの）を総括し、かつ比較文学比較文化が扱う問題系の概念を解説するもの。教科書なら解説をつけられるので、多少難解であっても（専門性が高くて）良いと思います。
- 演習的な問いを含んだ教科書。
- 事例を示しながら比較文学文化の理論を語る「比較文学文化概論」
- 『ミメシス』のちくま文庫版が絶版状態で、大変困っております。なお、ジェイムソン『政治的無意識』の翻訳も同様です。こうした古典的著作の翻訳が電子版として入手しやすくなることを心より望んでおります。
- 授業担当者が自分なりのシラバスを練るしかないと思う。とくに世界文学が急激な変化をとげている現状に対応するにはそれしかないだろう。
- 日本に関しては仏典・仏教関連文献の重要性が過小評価されているように思います。そこを扱える教科書があれば良いと思います。
- 英語圏の文化から少し距離を置いて、東南アジア、アフリカ大陸に関わる例や理論などを使うこと。
- すで実践されてきたことではあるが、「日本独自の文化」であると思い込んでいたものが、国外の様々な影響関係の中で生まれ・伝達してきたものであることを知るのが、自分でも勉強してきて面白かったことであるので、そうしたつながり（文学であれば間テキスト性など、映画であれば美術・芸術的な引用・関連、アダプテーションなど）に気付かせてくれるもので、学生にとっても分かりやすい例がたくさん含まれている教科書が良いと思う。
- いわゆる「教科書」を使うことはないような気がする。
- アジア系アメリカ文学と比較文学をテーマとした教科書があったら、参考にしたいです。
- 毎度プリントを配る方が鮮度が高いので、教科書は不要です。
- 理論の説明だけではイメージがつかめないなので、学生には、事例を見せて真似をさせる必要がどうしてもある。その一方で、個々の論文はケーススタディーや個別論になり過ぎてしまい、理論とどうつながっているのかが見えにくく、応用が利かないところがある。そのバランスが大変難しいが、何らかの形で、事例と理論の双方を見渡せる工夫が必要だと感じる。また通常出版の場合、教科書として気に入っていた本が2～3年で版が切れたり、在庫がなくなることが多く、新書や文庫など版が切れにくそうなものを常に探し続けなくてはならないストレスがあった。よって近年、オンデマンド出版の教科書も増えてきたが、教科書利用には向いている出版形態であると思う。

【Q2 9】比較文学比較文化関連教科書に対する要望（つづき）

- 初学者がゼロから理解できるやさしい比較文学比較文化の理論書、初学者が身近な現代的テーマから比較文学比較文化の眼を養うような教科書、比較文学比較文化の重要な書誌情報を総覧できる教科書。各々の分野やテーマ、ジャンルの最新研究とその動向を見せる『講座比較文学』のようなタイプの研究書は、なぜか学生がハードルが高いと感じるのか、大変残念ながらなかなか読まれない傾向にあると感じている。
- ピーター・バリーの『文学理論講義』にあるような実践編（あるテキストをある理論で分析した場合の例示）があるもの。それについて学生が議論できる例示があるもの。
- 文学と映画・マンガ・アニメ
- 大衆文化を扱ったテキストがあったら嬉しい。
- 比較文学の研究史（フィールド別やテーマ別でもよいし、世界や日本のなかの比較文学研究の動向や趨勢について、少しずつ触れることができるようなテキストがあれば良い。あるいは、比較文学で取り上げる思想家や比較文学で重要であった研究者を、時代に沿って紹介するようなテキスト。）
- 比較文学、比較文化の研究方法を具体的に示される代表的な論文と、各専門分野（文学、美術、音楽、演劇など）の基礎知識を備えるための必読書の紹介がある教科書があれば、自分が学生でしたら参考にしたいと思います。
- 文学作品の引用に、日本語あるいは外国語の朗読音源がついていると良いと思います。
- 体系的な理論書（方法論入門）が望まれる
- 大学院の授業なので、教科書は相応しくない。学部レベルでは、比較文学の授業が設置されておらず（設置しても3ヵ国語以上使いこなせる学生がいない以上、あまり意味はないから）、「比較文化学」の授業で、一部、比較文学の内容を取り入れるようにしています。その場合も教科書はいらないし、指定しても受講生は読んでくれないと思う。
- 比較文学の方法論の具体的な実践例を複数示したもの。
- 比較文学の「概論」レベルの授業で使用できる教科書があるとよい。授業回数（半期15回）を意識した章立てにしてもらえると使いやすくだらう。高校の国語などの教科書との内容的な連続性を意識して作っていただくといかないか。
- 短い英語テキストに懇切な解説と注釈をつけたものをならべた、古今の様々な文化圏の文学を英語で読むアンソロジー
- 導入書として、広く受け入れられるものがあればよいと思います。「アニメ」や「漫画」、「韓国文化」など学生に人気のテーマです。ですが、実際のところ、どれも層が固定されていて、万人受けするわけではないようです。より多くの学生を惹きつけるために、広く浅くポップ・カルチャーや広く現代の作品（文学、映画、漫画など）を扱うものがあればと思います。
- 難しいと思いますが、学生が興味を持ちそうな事例を使った比較文学の実践例が複数載っているような教科書があるといいかもしれません。
- かつてロベール・エスカルピが書いた「文学史の歴史」のような、「比較文学研究」「世界文学」、「国民文学」等の歴史性をグローバルに見渡した本。カザノバ『世界文学共和国』のような、文化資本のヘゲモニー闘争の歴史としての世界文学史。
- あるべき教科書はないと思う。
- Any book giving hints about interesting subjects like the one subject I use, would be great.
- 比較文学的なテーマをバランスよく扱いながら、授業内でうまくプロンプトしながら、グループワークにつなげるなど、アクティヴ・ラーニングに対応した教科書
- どちらかといえば卒業論文の執筆時に興味を持った学部学生を想定した教科書でもよいと考える。大学院生が必ずしも必要なスキルを備えて進学している訳ではない。
- 総論ではなく、具体的なテキスト、事例をもとにしているもの。
- 「芸術文化」の話題に特化した比較研究の入門書があればと思っている。
- 文学作品から映画、オペラなどへのアダプテーションの実例をまとめたもの。
- 専門外の学生にもわかる入門書

【Q2 9】比較文学比較文化関連教科書に対する要望（つづき）

- 分散的で非交流的な社会科学を「進化的統合」という視野をもって学際的に網羅した教材
- 留学生、日本人ともに、オタクカルチャーへの親和性とニーズが非常に高いので、その教科書があると助かります。
- 学部レベルでは、説明書的に、地域や民族、時代などの違いを比較することで、新たな発見が見つやすい例（ケース・スタディ的なもの）などを記載したもの。
- 複数の地域、複数のテーマを組み合わせて、世界に対して学生の関心を広げられるもの。
- 比較文学の研究史、理論、概念等について基礎的な情報が載っているもの
- 具体的な作品解釈のみならず、学部生にはさまざまな言語のテキスト、資料をどう手に入れることができるのかりサーチの仕方、資料収集の仕方、オンラインでの資料収集の方法なども提示されているとよいと思う。
- 比較文学比較文化の各手法や領域が、数多くの参考文献とともに提示されているテキストが欲しいと思います。自身でもぜひ作りたいと思っています。
- 現代日中比較文学研究
- 人類にはさまざまな文明・文化の流れがあることを具体的に示した議論があるもの。
- 世界文学というコンセプトに関わる重要文献の翻訳があると授業で使いやすいので、翻訳アンソロジーのようなものがあればありがたいです。
- 日本文学（翻訳文学を含む）を素材に、比較文学の基礎的な理論や概念が網羅的に学べるリーディングスのような教科書があれば良いと思います。
- ふだんの何気ない事柄や、文学と無縁のような分野でも、「比較文学」「比較文化」と共有する問題意識があることを示すような事例を多く採用してほしい。
- 専ら漢文の「訓読」に焦点を当てた漢文関係の書物がなかったため、自ら講義用ノートの内容をまとめて、上掲【教科書】【参考書】の回答に記した諸書を自ら執筆したのが実情である。
- Princeton sourcebook in comparative literatureのような資料が豊富なもの
- アジアの近現代社会の変と不変を世界的な視野から捉えるもの
- 私のアプローチがかなり時代として狭い範囲に集中しているので、教科書の必要性は感じていません。自分の研究を援用しています。
- ポップカルチャー史を学際的な見地から詳細に年表化した教科書。ポップカルチャーと言っても広いので、適宜、項目を細分化して作成されたものでもよい。
- 基本的な理論書
- 比較文学比較文化が学術の一分野として要請された背景の説明が詳しい教科書
- 従来の入門書よりさらに初歩的なレベルを見据えた、取り組みやすい構成・内容の教科書。比較文学が単に奔放なものではなく、本質的なディシプリンを確固としたものにする必要はあると感じますが、その一方で、東大の比較に進学して本格的に研究を志すような層だけでなく、比較文学という学問領域を知っており、その魅力や意義を理解している学生（大学院に進学しないような層）を増やせるような、裾野の広げかたも考える必要があるように思います。
- 旅行・仕事・留学・戦争、その他異国体験が自らを成長させた事例を分析した易しい論集
- 様々な研究者による具体的な研究テーマ、論文のタイトルなどを挙げた研究題目一覧のようなものを載せてほしい。
- 多種多様な理論ないし分析方法へのインデックスが充実したテキスト読解を軸とした教科書などを夢想します。たとえば、テキスト篇と理論編にわかれていて、相互に参照可能で、また、それが相互の注釈になるような。
- 多くの人文科学の研究分野で比較文学的な方法がとりいれている現状（卑近な例ですが科研の小項目にもそれは反映されています）をふまえ、比較文学ならではの方法や分析が概観できる教科書があると大変便利だと思います。
- 比較文学的な読解方法を具体的な作品分析をもとに解説している教科書があれば良いと思う

【Q29】比較文学比較文化関連教科書に対する要望（つづき）

- こんにち海外の大学院に留学するような場合には、20世紀～の批評理論に対する全般的な理解は必要不可欠です。その状況を考えれば、そうした批評理論との関係で比較文学比較文化という学問がどのような位置にあるのか、さまざまな批評理論とどのような関係（つながり）をもちうるのか、ということを示してくれる教科書があれば、学生にとってはありがたいと思います。
- 現在、比較文学比較文化について専門的な知識を得ようとする学生には、異文化間コミュニケーション能力と多言語リテラシーが求められているように思います。比較文学比較文化というディシプリンは多言語的な背景で作られてきたので、その歴史と現実を反映すべく、多言語使用と多言語リテラシー（英語による高度な運用能力と必ずしも一致しない）を取り入れた教科書のニーズがあるように思います。たとえば、影響力を持つ理論（「オリエンタリズム」など）を原著の抜粋と、複数の文脈における実践例とともに紹介するような試みがあってもよいと思います。
- 国文学・日本文学の基礎的な知識の学修を終えた上級学年（3, 4年生）向けの、国文学・日本文学の素材のみで構成された比較文学の教科書があるとよいと思う。もともと比較文学という学問は一国一文学の枠組みを乗り越えることを目的として始まったという歴史的経緯があるが、国文学・日本文学専攻のカリキュラムに無理なく収まるような内容の教科書の方が、実際に国文学・日本文学専門の学部生に比較文学を教える際には需要があるように思われる。
- 最新の研究動向を反映させた概論的な教科書

【Q30】比較文学比較文化教育の問題点や困難

- そもそも文学の素養がまったくない場合、比較文学の授業といってもピンとこない場合が多い。
- 比較文学比較文化は非常に広い学際的は学問領域なので、とくに教科書を作るのは大変難しいと思う。理論を教科書として定式化してしまうと、とくに学生はその理論に寄りかかりすぎて紋切り型の研究に陥らないか少し心配ではある。
- 直接比較文学の授業をもっておりませんので特にありません
- 文学はさておき、比較文化を教える際、学生に世界史もしくは皮相的な異文化理解に誤解されやすい。
- 比較文学比較文化教育は、ややもすれば異文化理解というイメージで見られやすい傾向がある。異文化理解も重要ではあるが、一般的包括的にとらえられてしまうと、比較文学比較文化教育の骨子は看過されやすい。どのように具体化して提示できるかが難しいところである。
- 英語以外の外国語習得へのアレルギー
- 学生の教養範囲がまちまちであること
- 比較文学比較文化の領域が広範でかつ入門レベルの教科書が各国文学等の他分野に比べて少ない点で難しさを感じる。
- やはり履修者の専門が絞り切れないところだと思います。
- 学生の外国語にたいする興味・熱意。大学で課される外国語の授業時間（単位）数が少ないこと。適切な教科書がないこと。佐々木英昭編『異文化への視線—新しい比較文学のために—』（名古屋大学出版会、1996年）は（若干内容が古くなっているものの）良かったが、絶版になったため教科書として指定できなくなった。
- ロシア語やロシアについて学んでいない学生に、日露比較文学・文化を講じること。（本学では、ロシア語は開講されているが、時間割の関係で、ほとんどの学生が聴講できない実態がある。また、ロシアについての専門的な授業も今まで開講されていなかった。）
- 民族や文化に対する偏見を意識的に克服するのが難しい。
- あまり文学に興味を持たない大学生が増えているようにおもいます
- 一昔前と比べて海外文学に触れたことがある学生さんの比率が圧倒的に下がってきていると感じます。比較対象として無前提に取り上げられるものが減ってきているということでもあるので、その点はやりにくいです。また、英語以外の言語を学ぼうというモチベーションが概して低いため、次世代の研究者を育てるのも難しくなりつつあると感じています。
- 説明する具体例は深い思弁を有するが、それを通して理解してほしいことはかえって簡単に言えてしまうこと。
- 多様な事例を盛り込むのは難しく、ある程度限られた事例に絞り込むことになる点。
- 受講生の語学能力が比較対象の原作を読めないことが多いこと。
- 筑波大学にやってくる留学生は「日本語」のトレーニングを受けているため、ヨーロッパ文学に対する知識が恐ろしいほど欠落しています。日本人学生も同様です。嘆いても仕方ありませんので、とにかく根気強く教えています。アウエルバッハを講読しているのは、どのような文学をどのような立場で研究するにせよ、この著作で扱われている作家・作品くらいは知っておいて欲しいというメッセージでもあります。
- 自分の文学に関する知識のバラつき。その意味ではICLAやJCLAの動向を見ながら、比較文学研究の趨勢を見ることは極めて有益。
- 学生にも複数言語の理解能力が求められますので、そこが難しいと思います。
- 学生が学んだことをどこに、どうやって活かせばいいかをもう少し積極的に説明したほうが、比較文学比較文化教育に対しての興味が上がるのではないかと思います。
- 日本文学の授業で比較文学文化的な領域に触れようとするたびに、自分も学生もいわゆる世界史的な基礎知識が足りないなと思うことが多い。今もウクライナの現代文学について紹介しようとして、慌ててクリミア半島の歴史などゼロから勉強し直している。『戦艦ポチョムキン』にオデッサ（オデーサ）が登場するのは映画研究者なら誰でも知っているが、その後のオデッサがどうなっていたのかも、なかなか情報が得られない。
- 特に日本文学主専攻の院生の場合、外国語読解能力に課題がある。

【Q30】比較文学比較文化教育の問題点や困難（つづき）

- 今のところ、アジア系アメリカ文学を教える時に、英語で教えているため、学生はそれだけで精一杯なので、込み入って比較文学について教えるまでにはたどり着かないのが残念です。
- 表象、言説、などの抽象的概念を理解させるのが難しいレベルの学生なので、とにかく二つ作品を並べて違いを比べる、という発想から抜け出せない。また、実例をそのまま真似ることはある程度できるが、それが何を意味しているのかを考えたり、実例から自分なりの論に応用する力がないので、作品選択も含めかなりの範囲を教員側が決めてあげないと課題に取り組めないのが、労力が非常に大きい。（その上で、課題の意図が伝わらないこともよくある） 実学的に決まった型や覚えるべき知識が定まっておらず、また国籍や対象が定まらないこと自体がアイデンティティでもある比較文学のような応用的学問体系を伝えるのは、学ぶ側のレベルによってはかなり難しいのではないかと思います。
- 年々、学生の興味関心の範囲が狭くなっていると感じている。そのため、比較文学比較文化という学問が扱う研究の多様性や広範性を見せようと、さまざまなジャンルやテーマを扱うと「興味がない」「ついていけない」というような反応を見せる学生が少なくない。比較文学比較文化が、各国文学・文化の研究者がいわば「片手間」で行う教育・科目に位置付けられており、比較文学比較文化の理論や方法論が体系的に教育されていない。比較文学比較文化の教育を受け、それにのっとった研究や教育を行える教員を採用することの重要性が大学部局で共有されていない。残念ながら、おそらく比較文学比較文化という研究のプレゼンスの低さを象徴しているように思われる。授業を実施するなかで、クロスジャンル研究への関心は高まっているが、クロスエリア研究への関心は低くなっていると感じる。ポップカルチャーへの関心の高さから、文学と映画や文学とアニメ、漫画とアニメ、映画と音楽などへのニーズが高まっていることを肌で感じる。その一方で特に日本人学生のクロスエリア研究への関心が低い。おそらく大学の学部やコース、科目の設計上、各国文学・各国文化に関心を持ち、そこから出て行かない傾向が強まるのだと思われる。比較文学比較文化へ誘う、あるいは橋渡しするような科目が低年次の教養科目や総合科目が設定され、周知される必要があるのではないか。
- 東大のように比較文学・文化のコースがあるところ以外の大学では、英米文学/日本文学/ドイツ文学科（専攻）等の一国文学研究制度（カリキュラム、教員等を含め）に学生は所属し、その科目履修で精いっぱいなのが現状であり、そうした学科・専攻は、そうした教員構成に拠るので根本的な変革の発想も意思もなく、再生産を繰り返す。（やがて社会からの不要・不用圧力で衰退してゆくにせよ）、当面はそうした制度下では、つまり文学系の大学（院）の学科、コースが根本的に変革されない限りは、「比較文学・文化」の授業は人気があり、面白いが「その他」扱いの授業である位置づけは変わらない。問題点は「比較文学・文化」の授業のどこかにあるというより、それを科目に含む学科・コースの（科目群、カリキュラム等の）現実社会離れた旧態依然さであろう。ここが変わらなければ何も変わらない。
- 文学作品を読む、文字テキストを読むだけでは大半の学生が不満をもつため、常に映像やアニメ作品等の非文字テキストとセットにして、それらと何らかの関連を付けられる文字テキストを共通テキストに選定しなければならない。
- 文学を扱うのは難しいと感じている。以前韓国文学を扱ったが、なかなか難しく、その後大衆文化を中心に扱うようになった。
- かなり広い知識が求められるし、エクスプリケーション・ド・テキストや交渉史や理論など、しっかりした研究メソッドや理論もあるが、幅が広すぎて、短い授業や講義のなかでは、総体化するのが難しいし、歴史学や文献学や心理学などに比較して、まるで曖昧な研究ジャンルのように思われがち。たしかに、授業の工夫も必要なのだが、「比較」という魅力的な言葉に誘われてやってくる学生たちが何に関心を持っているのか、不明瞭なときもあって、困難なときもある。
- とくに留学生の場合の話になりますが、「比較文学比較文化」という方法に辿り着くまでの基礎知識や基本的な読書量が不足しているため、思い通りの指導が難しく感じます。
- 外国語のテキストを読む力が足りない。
- 往時の日本人の異国への憧れや越境への強い思いを、若い受講生は必ずしも実感を持って理解していないようであること。

【Q30】比較文学比較文化教育の問題点や困難（つづき）

- 学生に古典的な「民族意識」が根強いこと
- 履修者のレベルがそろわないこと
- 大学院の授業は受講生が目的意識がはっきりしているから、さほど難しいとは思いませんが、学部の授業ではよほどレベルを下げなければ、「比較文学」を講じるのは難しいし、興味を持つ学生も少ない。「比較文学」の名前に惹かれて受講しても、内容を聞くと、「難しい」「面白くない」と言って、放棄してしまうケースがある。そのかわり、「比較文化学」のほうが学部レベルで講じると、かなり人気がある。
- 所属先においてはカリキュラムで制度化されていないために、積み上げ式のカリキュラムが用意されていないこと。比較文学的視点の提示まではできるが、その実践演習の場がないために比較文学研究が根づきにくい環境にある。
- うちの大学の場合、学生の多くは大学に入学した時点で、外国の文学についてほとんど何も知らず、興味も抱いていない。そういう学生たちに、国際的な視座から文学を研究することの意義を説くことはできても、その面白さを実感させるのはなかなか難しい。
- 自分は日本語と英語しかできないので、第三の言語を使った文化の三角測量ができない。だがこれは自分の能力が足りないのではかたがたない。
- 学生の「読み」の力が弱くなっていると感じます。解釈に必要な、思考への欲望が薄れているかもしれません。
- 学生が文学作品を読んでいない、読まないこと。
- 「比較文学」というディシプリン自体の地位の相対的低下があり、「比較文学」への関心が学生に感じられないこと。また大学設置基準の大綱化以降、日本の大学生の語学力が著しく下がったことを日々実感していて、また英語以外の語学習得が不要との雰囲気や社会や大学内に蔓延している。複数言語の習得が必要な比較文学にとって大きな危機だと感じる。大学の語学教育の多様化と強化がぜひとも必要と思われる。
- 言語間の壁、文化と文化を超える難しさ
- We lack translations. Saikaku's Niju fuko is not translate into English neither into Spanish. I had to do my own translation from the French to Spanish so my Spanish speaking students could follow the class.
- 学科内では人気があるが、どうしても自由だ、堅苦しく無いというイメージと結びつくやすく、ディシプリンに対する意識の低い学生がゼミに進学する場合がある。
- 本学において専門科目の開講数は限られており、その中で比較文学比較文化にテーマにした授業を展開するのは難しい。
- 担当者の専門によって、内容が大きく変わり、偏りが生じること。
- 所属している大学のように「リベラルアーツ教育」を謳う学部では、どうしても「1つの専門分野」を深めることがないままに、中途半端な「学際教育」を施してしまいがちである。本来的には、学生一人ひとりも自らの「親学問」が何に位置付けられているのかきちんと理解していることが大事で、そこから発展して、どのような学際的視点を持つべきかが明らかとなるはずである。「比較研究」の手法は、現在の人文研究では絶対的に不可欠であるのだが、その大前提となる基礎としての「専門性」を、どのように学生に獲得させたらよいのか、常に問題が山積していることを強く感じている。
- 体系化の困難、相対化に由来する理論確立の困難、権威的な教材の欠如、受講者の二項対立的な思考様式、
- 芸術系の大学で、実技を売りにしている大学だからかもしれないが、「理論」は、全体的に学生の頭に入らない。理論に限らず、抽象的な話、概念的な話の理解は非常に困難になっているように思われる。言語よりも、映像の断片などに反応するし、言語能力の衰えも非常に感じるので、集中力と関心を惹き続けるのに苦労する。ネットで仕入れたような世界認識、政治思想が強い学生が多くなり、理論や世界の見方それ自体に噛みついてくる例が少なくない。他者や異文化を理解しようという関心・興味それ自体が減衰しているようにも感じられるし、「自分」とは異なるものを咀嚼する能力が端的に衰え、自己の中に閉じこもる傾向がより悪化しているように感じられる。
- たとえば日本比較文学会の学会誌のように、日本文学の影響関係を詳しく調べたりする研究方法はわかりやすいが、それが何か新たな知見につながるかわかりにくい。やはり、比較という方法の到着点が曖昧である。

【Q30】比較文学比較文化教育の問題点や困難（つづき）

- 学部においては、外国語学習と結びつけずに行うと結局日本・日本語作品中心になってしまい、外国語教育と結びつけると作品を読めるようになるまでで課程が修了し、「比較」にまで至れないこと。勤務校レベルでは大学院でも事情は変わらない。
- 研究事例を精緻に紹介しようとする内容が細くなり、学生の興味喪失につながる。比較文学のスケールの大きさと研究の精確さを、限られた時間内に説明するのは難しい。理系の学生や人文学に進まないと思われる学生にこそ、比較文学比較文化研究の実態を知ってほしい。
- ともすると、とりわけ言語の問題もあり、うすく浅い表面的な比較で終わってしまうものもあるので、比較対象を深く掘り下げつつ独自の観点が見出せるように資料的、理論的に貪欲に取り組み、その発掘と読みこみのおもしろさにどっぷりひたってもらいたいと感じている。
- 実際にやってみると、学生は関心を持つと思います。それが比較文学比較文化と意識されていないだけで、手法は人文系の多くの研究に通じるものだと思っています。
- 学生の世界近現代史の基礎的理解の不足。
- 上の「危ぶまれている理由」に記したような問題が重い。前提となる諸語の習得ができていない。さまざまな文明・文化のあり方を「肌で感じる」ようになっていない。
- 文学離れが著しく、文学テキスト同士の比較分析などが事実上なかなかできないこと。
- 共通科目のような位置づけになりやすく、専門を超えた多様な学生が受講するため、幅広いニーズに対応しようとする専門の学生にとって物足りない内容になってしまう点。比較文学比較文化教育の必要性が各国文学の分野でも認識されるようになり、「調査趣旨」にもあるように、他のディシプリン（特に日本文学関連）との差異が曖昧化している点。
- 学生たちが基本的に文学作品に接していない。また、文学と漫画やアニメ、映画などの他ジャンルを厳密に区別しすぎて、縁遠い存在にしてしまっている。高校国語までの科目教育に基づいた先入観にとらわれている。
- 上掲【危ぶまれている理由】に記した一事に尽きる。乃ち曰く：- 「外国語力なくして比較文学なし」。又曰く：「外国への興味なくして比較文化なし」。
- 語学教育を踏まえた上での比較文化教育を強化すべきが、なかなか認識されないこと
- ロシア語を知らない学生が含まれるため、言語学的な特徴にふみこめないこと
- 本学は女子大学であるのでジェンダーやフェミニズムに関する視聴覚資料を使用してもハラスメント問題に発展する懸念は少ないが、共学大学であったりすると、そのあたりの資料の扱いや説明の仕方についてハラスメント回避の点で悩ましいところがあるのではないかと推察する。また、宗教に関連するテーマに触れるテキストを扱う場合も、比較文学比較文化関連科目の場合（特に留学生が受講しているケースなど）は慎重に配慮している。
- 一国、一言語の文学研究・文化研究自体の成立が難しいので、比較研究はさらに困難。
- 日本は分野・領域横断に抵抗がないことがかえって比較文学比較文化の重要性の理解を阻害していると思われること。
- 教科書、入門書の少なさ
- 大多数の学生の読書量が激減しているため、共有できるカルチュラル・リテラシーが低下している。そのため、事例を提示しても問題の理解を深めてもらえないことが増えた。
- 原語で書かれた資料を使用しないと理解が難しい内容について、語学力が不十分な学生に授業を行うのは難しい。
- 受講生の関心領域が多様なので、レディメイドのディシプリンではなくオーダーメイドで対応する必要があることが困難といえば困難ですが、それはむしろうれしい悲鳴と言うべきかもしれません。根本的な困難があるとすれば、いつまでたっても、「比較」をたんに比べることとしか捉えられない受講生もわずかながらいることで、いささか無力感を覚えます。

【Q30】比較文学比較文化教育の問題点や困難（つづき）

- 上記と関連しますが、学際的な方法が各分野で取り組まれているため、比較文学でこそ可能な研究を学生が見つけ出し、それをほかの受講生たちも共有できるようにすることです。理想としていますが、実行するのはなかなか難しいです。
- 学生が比較文学的に作品を読むことに面白さを感じるためには、やはり相応の説明が必要となる。しかし、私は教育学部に所属しており、必ずしも文学に関心を持って大学に入学したわけではない学生たちにやや専門的な内容を説明することに躊躇を感じてしまう。他方で説明を簡単にすると、表層的な内容で終わってしまう。そのバランスが難しい
- 偏に学生たちの関心と、いわゆる学んできた「比較文学・文化関連」の知見の距離です。一応、分離統合による差異の検証だ、みたいなことは標榜するのですが、その「分離統合」の場に持って行くまでだけでも「一苦労」で済めばいい方、という印象です。困難はなかなかです。
- やはり比較文学比較文化の根の部分に「言語越境」の問題があるのだが、実際に授業をするとすると、学生の外国語力は前提にできません。
- 担当した授業は「比較文化論基礎」でしたが、基礎的な概念に対する理解と、そうした概念を論述で活用する能力を育成することと、より具体的な事象を紹介することのバランスを図ることに苦労しました。具体的な事象（作品）を出発点とし、その解説を補うために理論等を紹介しました。その際、教科書的な参考書も参考したが、資料を自分で寄せ集める必要を感じました。また、比較文学比較文化に関する能力は長期的に育成されるものであると思いますので、半期だけの授業では学生の成長を適切に図り、評価することも難しく感じました。
- 本務校の学生は、日本の歴史及び世界の歴史に関する知識が乏しく、歴史的文脈の理解を前提とする比較文学比較文化のいくつかのテーマ（例えば日本の近代化をめぐる問題など）を教える際に少々困難を感じる。また、上記のことと関わることだが、「比較」という複眼的な思考を発動するためには、まず、ある程度特定の言語・地域の文学・文化についての知識が必要であり、初年次の学生には「比較」の学修はハードルがやや高いように見受けられる。マジョリティの学生は自分の所属する学科の専門的な理解の構築を優先するため、学際的・国際的文化研究を標榜していない、例えば国文学科・日本文学科の学生にとって、比較研究の方法論は、二の次、三の次の位置づけになってしまっているように感ぜられる。
- 授業時間が限られているため、幅広く取り組む時間が足りないこと。

【Q3 1】感銘を受けた比較文学比較文化の授業

- 授業というよりも比較文学の研究室に在籍できたのがとてもよかったです。様々な分野の研究者、学生がいて、人文科学の新しい分野がここに切り拓かれるという期待に満ち溢れていました。
- 留学先のアメリカで受けた19世紀のアメリカで発行された黒人新聞の調査実習のクラス。クラスはアーカイヴの一室で行われ、各受講生が発見した記事や資料を持ち寄って、その記事やイラストの歴史的な意味を議論するようなクラス。毎回、貴重な生資料をみるだけでも刺激があった。
- 芳賀徹先生の絵画と文学の授業、発想が自由
- 一部の学者に「学問ではない」という批判を受けていると思いますが、自分としては修士課程に聴講した平川祐弘先生のゼミで比較文学比較文化の面白さをはじめて体得したのである。
- プリンストン留学時代に受講したLinda Shireの授業。タイトルは失念した。「フェミニズム」がついていたと思う。教員の理論的視座の広さ・深さに感心した。
- 学生時代、比較文学やそれに類する授業は開講されておりました。
- 平川祐弘先生の講義、芳賀徹先生の演習、川本皓嗣先生の詩歌解釈。
- 稲賀先生の放送大学の授業です。『日本美術史の近代とその外部』という教科書です。
- 私自身が学生のときは、比較文学比較文化関連の授業がありませんでした（あるいは、あることに気づきませんでした）。
- 論文指導のゼミだと思います。川本先生のランボー論を、目次を作りながらじっくり読んだことをよく記憶しています。わたしがこれまで学ばせていただいた比較の授業は総じて、テキストを大切にしていました。その姿勢が比較で学んだ一番のことだと思います。
- 授業ではないが、東京支部の比較文学の方法シリーズ1、小林茂先生のご講演は、必須資料である。
- 古田島洋介「中国古典の中の日本人イメージ」で原典を味読すること。
- 駒場での大学院授業はおもに文献講読であったが、研究者になる上ではそれがきわめて有益であった。ただ、概論的な「比較文学」の授業では、自分なりの戦術を自分で磨くしかなかった。幸い、これまで担当した諸大学（非常勤を入れれば10校近い）で、自分の方法が汎用性を持つことは実感できた。
- 西成彦氏や中川成美氏の授業を受けて刺激を受けたはずだが、恥ずかしいくらい具体的な内容は覚えていない。ただ、カフカやアレイヘム、知里幸恵や松井太郎、多和田葉子まで、素晴らしい作家たちの作品に導いていただいた。授業は基本的には講義形式だったが、話が刺激的で充実していたため、授業で挙げた作家たちの作品を自分で探して読む気になった。
- 学部時代に受けた授業における複眼的な視座からのテキストの批判的精読
- 今橋先生が教えた比較文学の授業が最も参考になりました。
- 大学院時代に受けた授業はどれも勉強になったが、今橋映子先生のクロスジャンルの授業は、いまだに自分の授業の構成を考える上で型になっていると思う。また、学部生時代の小沢俊夫先生のグリム童話の授業から大学の授業の面白さに開眼したが、昔話のような物語の構造を見るという視点はどのような作品でも応用が利くので、学生に教える上で、どんな対象にも応用が利く知識や方法論を与えることは、常に意識しているように思う。
- 一つは比較文学比較文化の理論に関する講義。エクスプリカシオン・ド・テキストや間テキスト性、比較芸術、異文化理解などが、具体的な文字・視覚テキストの抜粋によって明晰に解説されていた。回答者自身が行う授業のモデルの一つになっている。もう一つは、ある文芸誌の一号研究を行い、発表を行った演習。それを自身の関心や研究テーマに引きつけて、小説、詩、戯曲、評論、雑文、広告、挿絵、写真などさまざまな種類のテキスト多角的に分析した経験は、クロスジャンル研究への眼を開いてくれたと思っている。
- 東大に入学した年度が教養学科に比較日本文化論科が新設される前年に当たり、平川先生を筆頭に比較文学比較文化の先生方が毎回交代し、毎回テーマが異なるオムニバス形式の特別講義科目が開講されました。これを機に比較文学比較文化を知り、比較日本文化論への進学を強く意識するようになりました。
- 比較文学で取り上げられる理論やテーマを、毎講義1テーマずつ紹介する「理論と方法」の授業。
- 芳賀徹先生の授業、自由奔放かつ細心。

【Q3 1】感銘を受けた比較文学比較文化の授業（つづき）

- 芳賀先生の蕪村についてのゼミ。文学と絵画の交響する境地を大学初年次生にも伝えてくださいました。何より対象への愛、対象への陶醉が伝わってくる芳賀先生自身の語りとその佇まいが授業の核でした。また、ヴァレリーの「ドガ・ダンス・デッサン」のフランス語講読の保莉瑞穂先生の大学院ゼミも印象に残ります。虚心坦懐にテキストに向き合う姿勢を教えられました。平易な言葉で語られていましたが、芸術の深遠な世界の拓けが感じられる授業でした。授業には、教員の日頃の文学や芸術への接し方が表れるのだと思います。「授業準備」といった限定された問題ではないのだ、ということが教員になってからしみじみと感じられます。
- 横断的な主題に対し、比較文学の観点から異相が異なる題材を対照させることにより、それぞれの特徴が浮かび上がる授業を通して、比較文学研究の可能性を実感させていただきました。
- 新谷敬三郎先生の大学院比較文学講義：文体論やフォルマリズム、メディア史などの方法論的裏付けのもと、近代日本の詩文学の特徴について具体的に論じたもの。
- All the classes of Haga Toru for instance were very inspiring. Comparative Literature must be taught in a poetic way.
- 大学院の指導教員の授業では、草稿研究、物語論、翻訳論、比較芸術論など様々な手段を用いて多角的に考察することを教えられた。
- 川本皓嗣先生の授業は強く印象に残っています。
- もう大分昔になりますが、東京大学の比較文学比較文化の大学院で受けた名授業の数々。
- 学芸員資格取得のために受講した「比較民俗学」の授業で、アイヌ民族の文化（ことに神話を中心とした口承文芸）について学んだことは、今でも記憶に強く残っている。
- 比較宗教の講義は、非常にありがたかったです。世界を認識したり何かを感じる価値のOSとしての宗教の役割を認識できたし、非常に大づかみでも、それぞれの宗教や価値体系ごとの色々な差を理解し考察する糸口を与えていただけだったので。
- 学部レベルでは「しぐさの比較文化」などは面白いと思ったが、一過性であり、その後面白いと思えた授業は残念ながら日米共になかった。実証的な研究は細かすぎたし、テーマの比較などは両者の高度な知識が必要で、授業としては楽しめるものはなかった。
- 特に絞ることはできません。むしろ多種多様な授業に参加できたのが有益でした。
- 亀井俊介教授の一・二年生向けゼミ、ナショナリズムの文学。由良君美教授の一・二年生向けゼミ、メルヘンの論理。同大学院生向けゼミ、ロマン主義研究。
- 部分的な学習（「比較文化」となっているのに、たとえば、フランス19世紀の有名詩人のテキストを読解するばかり、といったようなものばかりで、「比較」になっていない）
- 増成隆士先生の「現代美学」。志村けんのコントなどから話が始まり、いつのまにかヘーゲルの美学までたどりつく内容に毎回感心していた。
- 芳賀徹先生・平川祐弘先生・小堀桂一郎先生・新田義之先生の授業は強く印象に残っているが、意外なことに授業の方法・内容などについての具体的な記憶は薄い。感銘を受けた鮮明な記憶が残っているのは、学部生時代に受講した高階秀爾先生の19C西欧絵画に関する講義である。J. L. DAVID, 1793《La mort de Marat》からP. PICASSO, 1907《Les demoiselles d' Avignon》までと時期を区切り、要所となる絵画をSLIDESで映写しながら詳細な説明を加えてゆく名講義であった。あくまで「西欧絵画史」の一環であり、「比較文学比較文化関連授業」と呼び得るか疑問の余地は残るが。
- 今橋映子先生の院ゼミ。ディベートや、資料作り、書評の書き方など実践的で素晴らしかった。
- 大学院時代で、日本語や中国語のもののみならず、英語で原著を指導教授と一緒に読むとき
- 日本近代文学とロシア文学の関連性についての授業（柳富子先生）。日本文学作家としてしか読んでいなかった各種小説がロシア文学に触発されたものであったことを論じてくださり、そのおもしろさによって私は自分の専門を比較文学に変更しました。

【Q3 1】感銘を受けた比較文学比較文化の授業（つづき）

- Emmanuelle Hénin, *la vanité et la vision dans le théâtre*（演劇における虚栄と視覚）、演劇だけではなく絵画を分析して、活写法のような文学表現と比較検討をしていた。また虚栄というテーマを据えることで議論が収斂されていた。以上のことから、1つのディシプリンだけでは理解できない重層的な表現効果が明瞭になっていた。
- 佐藤伸宏先生（東北大＝国文）日本近代象徴詩
- 井上健先生（東北大＝国文での集中講義）日本近代文学と翻訳
- 菅原克也先生（東北大＝国文での集中講義）日本近代文学とエキゾチズム
- 高山宏先生（東北大＝英文での集中講義）イギリスにおけるピクチャレスク文化
- 芳賀徹の比較文学比較文化論
- 学生時代に受けた柳富子先生の「比較文学」の授業が印象に残っている。「資料に語らせることの重要性」について教えを受けた。
- 比較文学比較文化関連授業とは必ずしも言えないが、ドイツ文学の演習科目で、担当教員が毎回一篇の詩を題材として、日本語訳を複数紹介し、その分析を一緒に行ってから学生に自ら日本語訳を作成させ、共有させた授業が非常に良かったと記憶しています。複数の既存訳を参考することにより、解釈の多様性と解釈における歴史的制約に関する理解が深まったように思います。

【Q3 2】比較文学比較文化教育に対するご意見

- 文学について教えることに難しさをおぼえており、比較文学比較文化にまで関心が回らないというのが本音です。
- アメリカ大学のように批評理論を教えることに傾くのではなく、実証性を大切にした文学研究の芽を育ててきたように思うし、今後もそうあってほしい。
- まだ十分に認知されていないので、学問の一分野として早く確立されると嬉しく思います。
- 日本の古典（源氏物語など）とその英訳を同時に教えることに取り組み始めた。いまのところ、それなりの手応えを感じている。
- このところ、「文学」を大学で専攻すること自体が危うくなってきており、今の日本社会で文学研究者として生きることの困難を感じるが増えてきましたが、その点、比較文学は学際性や国際性が担保されるため、まだしも存在意義をアピールしやすいのかなと思っています。
- 大学生世代の現代的な興味関心に響く題材の選択が求められていると思うが、力量の問題もあり、また、参照できる事例もどうしても近代文学に偏っているため、結果として、多くの学生の関心を惹きつけるような内容を展開するのが難しいと感じている。
- 比較文学比較文化と異文化コミュニケーション論の融合、そして現実社会での比較論の有効性の具現化。外国語教育を「無差別的に要請する」日本における「翻訳テキスト批評」ぐらいの一般大衆まで日常的に楽しめられることを比較文学文化教育を通して実現し、長年の外国語学習は無駄である虚しさを軽減できるように希望したいです。
- 古典的な著作の翻訳を絶版にせず電子化するといった、比較文学比較文化教育のインフラの維持整備が不可欠だと考えております。
- 自身の研究を支える上での裾野を広げる努力が、学部生向きの講義科目のコンテンツ充実にも活かせると思う。
- 好みのテキストしか扱わないような非体系的な教育が行われがちな傾向は改めるべきだと思います。
- 他者と出会う体験について文学や文化の面から考える、という意味では、比較文学のような学問は、グローバル化が進んでいるとされる現在こそ必要だと言う気がしている。その中で、学生に比較文学の広大な広がりの中のどの部分を伝えるべきかは、自身の能力の限界ともあいまって、常に難しい課題であると感じる。
- 現在、大学院入学者が中国からの留学生に偏っており、比較文学比較文化の授業もおのずと日中比較文学比較文化に寄せた内容にせざるを得ない状況になっているのは、必ずしもそれを専門分野としていない回答者からすると率直に言って辛い。日中比較文学比較文化を除くと、翻訳論やその他の地域のクロスエリア研究への関心が低くなっており、それを取り上げたくても肝心の受講生が集まらず、非常に苦しい状況である。比較文学比較文化に魅了され、体系的に学び、ここまで研究に打ち込んできたが、実際に大学に勤務してみると、思っていた以上に比較文学比較文化への関心や理解、認知が低かったことにショックを受けた。大学学部・研究科のコース・科目設計や、受講生の出自や興味関心、習得言語に大きく左右されているのが、残念ながら現在の比較文学比較文化教育の状況であるように思われる。
- 所属する文学部では伝統ある文学・史学関連の専攻の教員達が、文化理論を使って、ときには「比較」を謳いさえして学生を集めようとする一方で、比較文学比較文化研究者の任用を歓迎しない傾向があるように感じられます。また学生の側も、たとえ比較文学比較文化の講義に関心があっても、複数のディシプリンにまたがったり、外国語を使ったりする研究を自ら行うことには尻込みしてしまい、演習や卒業論文のテーマに比較文学比較文化は選択しないことが多いです。少子化で「優秀層」が入学して来なくなっている大学では、後継者を育てることがいっそう難しくなっています。
- 東アジア関係の比較研究がより一層活性化することを期待しています。
- 現状は、研究者主体でバラバラに指導しているような状態。たとえば、東京大学の「比較文学比較文化」講座でどのようなカリキュラムやテキストを使用しているのか、国外の大学の「比較文学」教育がどのようなテキストを使うのか、参考にさせてもらえると、学生にとっても教員にとっても、便利かもしれない。

【Q3 2】比較文学比較文化教育に対するご意見（つづき）

- 文学や芸術の教育に関わっていれば、必ず「比較」の問題系につき当たるだろうと思っています。「比較文学比較文化」と銘打たないディシプリンにあっても、常に研究者・教育者が生きる現場や共同体に照らして考えなければならない局面が必ずや出てきます。「比較文学文化教育」をディシプリンとして掲げる際に必要となる倫理について、研究者の間でも問題意識が共有されるようになることを期待しています。
- 「世界文学」とのコラボレーションと差異化が必要であると思います。
- 学科として比較文学文化の場を持っている場合以外であれば、教養教育の応用の場を活用し、他分野が集う全学教育の場を通しての教育実践が有効ではないかと考え、微力ながらその可能性を探っています。学生の興味関心は横断型のリベラルアーツに向かう傾向があるように見ているのですが、所属先では教養教育自体も軽視されているところもあり、教員のコマ数調整の扱いとされている面もあります。とりわけ人文系分野においては学内外の多分野との交流も大事なので、カリキュラムにて比較文学文化の場を作り上げることが肝要であると考えています。
- L'explication de texte is a marvelous tool. La poétique de l'espace of Bachelard, too. Tools do not need to be complicated. To get the East and the West nearer is a big deal. Any little effort is valuable.
- 先ほどの設問のなかで、受講者の受け止め方を問うものがありましたが、共通科目の講義の場合、単位の必要から受講するだけの者もあり、関心、理解度はまちまちなため、平均的な数値で評価をだすことはできないと思いました。ただ、毎年、非常によく理解し、良いコメントペーパーを出してくれる学生が一定数いるので、それを励みに講義を行っていたという状況です。
- 先に述べたように「リベラルアーツ」を謳う学部教育では、「1つの専門分野」を深めることがないままに、中途半端な「学際教育」を施してしまいがちである。学生一人ひとりに対して、どのように自らの「親学問」が何であるかを意識させるか、そして、そこから発展して、どのような学際的視点を持つべきなのか——20年以上も学部において「比較文化論」を教えてきてはいるが、いまだに指導方法が確立できておらず、手探りを続けている感がある。しかも近年では、高校卒業時における基礎学力——例えば、日本の古典文学や歴史認識に関する基礎知識は、20年前に比べて明らかに弱くなっており、学際的な視点を持つ云々以前に、素養としてもつべき知識から教えねばならず、その点で苦勞が倍増している。比較文学比較文化教育をより「確立した」ものとして推進させるためには、大学入学以前に施される教育実態までも視野において、今後議論されるべき点もあるのではないかと個人的には考えている。
- 教育としては、日米比較文化などわかりやすい内容で入口を見せ、その後、具体的な事例・領域での比較や影響関係に入っていった方が興味をひきやすい。ただし、比較文化はわかりやすいが、比較文学は問題あり。影響関係に終始するなら別領域として立てる必要があるのか疑問であり、同時に、対比研究は実証性の問題が残る。一時の「表象研究」のような複数の領域にまたがる新たな枠組みをつくることができれば望ましい。文化の中に何を含めるかの問題は常にあるが、文学や映像であれば「イメージと思考の表現」という領域で、時代に合った新たなパラダイムを示す括り（パラダイム）をつくれば存在意義はあると思う。
- グローバル化が進む現在多文化的な教養を持つ重要性を増しているにも関わらず、ナショナリズムや実態に合わない「英語中心主義」（英語圏研究に非ず）が喧伝され押しつけられがちな日本の状況に苛立っています。「主流」に対してゲリラ的に闘うことこそ比較の王道という気持ちもありますが。
- 比較文学比較文化の研究の面白さが伝わるような教育をしたいと思っていますし、それで使用できるテキストを作る用意をしたいと思っています。そういうテキストがいくつもできてほしいなと思います。
- 語学の問題、広い視野の問題があって、実質的な「比較文学比較文化教育」は難しい。それでも、天才的と言えるような語学のセンス、広い視野の人がいないのではない。（多言語ができるだけで、思想がない人はダメ）。そのような人は嫌われているようである。（指導する地位にある側の嫉妬の問題）。この問題を何とか解消しないと、天才的な活路が生じていても、未然に潰されるということになる。

【Q3 2】比較文学比較文化教育に対するご意見（つづき）

- カリキュラムとしては設定しづらくなっているが、方法としては様々な科目で教えることができると考えている。留学生たちとの協同科目などが増えているので、むしろ比較文化的な話題から比較文学に導く可能性が広がっていると感じる。
- 私が属する学科は、当初「比較文化学科」の名で発足するはずであったが、そのように名乗ると多めの教員数を必要とするため、名称を「言語文化学科」に変え、教員数を少なめに抑えて1992年に出発した。しかし、時間の経過と共に、このような経緯を弁えぬ教員が増え、学生の外国語力の低さも相俟って、十年前には「日本文化学科」と改称、そのまま現在に至っている。文学に限らぬ学びの広さは確保されているものの、比較文学比較文化教育の色彩は薄くなる一方だ。数年前、新任教員を採用するための人事面接の席上、私が「国際学会で研究発表をするとしたら、何語で発表しますか？」と尋ねたところ、休憩時間に学科主任（当時）から「あのような質問は、圧迫面接と受け取られるのでやめてほしい」と注意を受けた。今なお私は自分の質問がなぜ圧迫面接になるのか、まったく腑に落ちないままである。率直なところ、当の主任教員自身が外国語の実力に自信を欠いているため、私の質問に精神的な圧迫を感じたのが実情ではないかと疑う。もし然りとせば、いずれ我が所属学科の教員は国際学会で研究発表に及ぶ実力を欠く「内向き」の者ばかりとなり、比較文学比較文化教育の色彩はますます薄くなってゆかざるを得なくなるだろう。すでに数年前、フランス語が堪能な教員は「自分の存在理由がわからない」と嘆いて他大学に転出し、ドイツ語に明るい教員も本年度末（Mar. 2023）を最後に定年退職となる。五年後、些少とも中国語をたしなむ私が定年退職を迎えれば、比較文学比較文化教育の色彩は皆無、はかなく潰える可能性ナシとしない。
- 英米だけでなく、アジアへの比較文化的な把握をさらに強めるべき
- 比較文学的分析手法は、あらゆる「テーマ」「専門」に広く用いることができるだけに、「比較文学」という専門領域として選ぶ学生が増えにくいように感じています。「手法」としてのおもしろさを超え、専門領域として認知されることが求められると考えています。
- さまざまな分野で国際化や学際化が進む現代だからこそ比較文学比較文化を基礎から学ぶことの重要性がさらに強調されるとよいと考える。
- 比較文学の知識は短いタイムスパンの中で実利を生むものではない。それでも醸成される感性が世界を理解するには必須であることを、研究者が学術成果物で証明してみせることが必要だと思う。
- 学生が比較文学の授業を学べる機会を増やしたい。
- 比較文学比較文化は、個別ピラミッド型のディシプリンとは異なって、多様な分析方法・視点のネットワークだという考え方を受講生と共有するところから教育も始まるように感じています。同時に、それぞれの分析方法・視点・理論については、ディシプリン型できちんと学ぶことが求められるので、当然のことながら、全体の要求水準は高くなります。その意味で、ネットワークの見取り図と、それぞれの理論の特質をバランスよく示すガイドブックが必要であるように思います。
- 大変興味深いアンケートで、調査の分析や成果となる教科書を拝見できることを楽しみにしております。
- 教科書に関する質問で書いたことと重なりますが、複数の言語による高度な運用能力の育成とは必ずしも一致しないところでの多言語リテラシーを育成することは、これからの比較文学比較文化教育が担うべき重要課題の一つであると思っており、自分の教育研究活動に関連した実践を試みるとともに、学界での議論の深化にも期待しております。そのために、東西間および東アジア内での国際的な連携を強めていく必要もあるのではないかと思います。
- 関連開講科目を増やせればもっと多角的に充実させられると思います。そのためには、特に比較文学比較文化を前面に打ち出した学科以外では尚更、比較文学比較文化教育の必要性・重要性についての他分野の大学教員の理解を深めることも必要だと思います。

第Ⅱ部 比較文学比較文化教育シラバス調査

第Ⅱ部では、[本科研費プロジェクト](#)の一環として実施した比較文学比較文化研究を実践している大学・大学院を対象としたシラバス調査のデータを一覧化している。

なお、シラバス調査の概要は以下の通りである。

【調査名】「比較文学教育に関するシラバス調査」

【調査期間】2022年5月12日～7月31日

【調査対象】全国の大学における2021年度のシラバス

【調査方針】2021年度シラバスを調査し、比較文学比較文化関連科目の情報を収集する

【調査手順】第1調査：大学ベース調査Ⅰ
(大学ごとに「比較」関連科目シラバスを調査)



第2調査：研究者ベース調査
(日本比較文学会会員が担当している科目を調査)



第3調査：大学ベース調査Ⅱ
(第2調査のフィードバックに基づき、第1調査で未調査の大学のシラバスを調査)



スクリーニング
(収集した科目が実際に「比較」に関する授業を展開しているかを本科研費メンバーにより精査)

※なお、本調査の手続きやデータ解釈に関する詳細については、東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC)発行のブックレット『[「比較研究とは何か」を語る二つの視座](#)』52～66頁と『[社会調査最終報告書\(ワークショップ編\)](#)』5～24頁を参照されたい。

| | | |
|------|----------------------------------|------|
| 表 1 | 国公立・私立別「比較」関連科目の割合 | P.42 |
| 表 2 | 文部科学省「令和3年度統計学校基本調査」：大学数の割合 | P.42 |
| 表 3 | 大学形態別「比較」科目開講大学数・割合 | P.42 |
| 表 4 | 学部・大学院別「比較」関連科目の割合 | P.43 |
| 表 5 | 学部設置「比較」科目の割合 | P.43 |
| 表 6 | 大学院設置「比較」科目の割合 | P.43 |
| 表 7 | 授業開講期間の割合 | P.43 |
| 表 8 | 日本比較文学会会員・非会員科目の割合 | P.44 |
| 表 9 | 日本比較文学会会員・非会員科目の割合【スクリーニング削除データ】 | P.44 |
| 表 10 | 「比較」名称あり・なし科目の割合 | P.44 |
| 表 11 | 「比較」名称あり・なし科目の割合【スクリーニング削除データ】 | P.44 |
| 表 12 | 「比較」関連科目担当教員の専門分野 | P.45 |
| 表 13 | 「比較」関連科目の種類別の割合 | P.45 |
| 表 14 | 「比較」関連科目において取り上げられているエリア数の割合 | P.46 |
| 表 15 | 「比較」関連科目の題目で採用されているキーワードの割合 | P.46 |

表 1

国公立・私立別「比較」関連科目の割合

| 大学形態 | 開講大学数 | 開講大学割合(%) | 科目数 | 科目割合(%) |
|------|-------|-----------|-----|---------|
| 国公立 | 31 | 31 | 269 | 31 |
| 私立 | 68 | 69 | 597 | 69 |
| 合計 | 99 | 100 | 866 | 100 |

表 2

文部科学省「令和3年度統計学校基本調査」：大学数の割合

| | | 計 | 国立 | 公立 | 私立 |
|--------|---|-----|----|----|-----|
| 大学 | n | 803 | 86 | 98 | 619 |
| | % | 100 | 11 | 12 | 77 |
| 学部設置 | n | 778 | 82 | 95 | 601 |
| | % | 100 | 11 | 12 | 77 |
| 大学院設置 | n | 652 | 86 | 86 | 480 |
| | % | 100 | 13 | 13 | 74 |
| 修士課程設置 | n | 622 | 86 | 84 | 452 |
| | % | 100 | 14 | 14 | 72 |
| 博士課程設置 | n | 461 | 77 | 69 | 315 |
| | % | 100 | 17 | 15 | 68 |

[註] 文部科学省「令和3年度学校基本調査」に拠る

表 3

大学形態別「比較」科目開講大学数・割合

| | | 大学形態 | | | |
|------------------------|---|-------|----|----|----|
| | | 計 | 国立 | 公立 | 私立 |
| 比較科目開講大学数 (統合リスト限定) | n | 99 | 24 | 7 | 68 |
| | % | 12.33 | 28 | 7 | 11 |

赤枠データに対する度数と割合

[註] 大学形態数は文部科学省「令和3年度学校基本調査」に拠る

表 4

学部・大学院別「比較」関連科目の割合

| 設置部門 | 科目数 | 科目割合(%) |
|------|-----|---------|
| 学部 | 538 | 62 |
| 大学院 | 235 | 27 |
| 不明 | 93 | 11 |
| 合計 | 866 | 100 |

表 5

学部設置「比較」科目の割合

| 大学形態 | 科目数 | 科目割合(%) |
|------|-----|---------|
| 国立 | 106 | 20 |
| 公立 | 39 | 7 |
| 私立 | 393 | 73 |
| 合計 | 538 | 100 |

表 6

大学院設置「比較」科目の割合

| 大学形態 | 科目数 | 科目割合(%) |
|------|-----|---------|
| 国立 | 90 | 38.5 |
| 公立 | 1 | 0.5 |
| 私立 | 144 | 61 |
| 合計 | 235 | 100 |

表 7

授業開講期間の割合

| 開講期間 | 科目数 | 科目割合(%) |
|-------|-----|---------|
| 半期 | 780 | 90 |
| 通年 | 54 | 6 |
| 集中 | 20 | 2 |
| クォーター | 5 | 1 |
| 不明 | 7 | 1 |
| 合計 | 866 | 100 |

表8 日本比較文学会会員・非会員科目の割合

| 会員区分 | 科目数 | 科目割合(%) |
|------|-----|---------|
| 会員 | 323 | 37 |
| 非会員 | 525 | 61 |
| 不明 | 18 | 2 |
| 合計 | 866 | 100 |

表9 日本比較文学会会員・非会員科目の割合
【スクリーニング削除データ】

| 会員区分 | 科目数 | 科目割合(%) |
|------|-----|---------|
| 会員 | 160 | 24 |
| 非会員 | 511 | 76 |
| 不明 | 0 | 0 |
| 合計 | 671 | 100 |

スクリーニングで削除された科目（シラバス上は「比較」関連科目だが、実質的にはそうになっていない科目）のデータ。

$$\frac{\text{会員担当「比較」科目数 } 323}{\text{会員担当総科目数 } 483} \times 100 = 67\%$$

本調査において、日本比較文学会の会員が担当する科目は合計483科目抽出されたが、このうち実質的に「比較」関連授業を展開しているのは323科目（67%）であった。

表10 「比較」名称あり・なし科目の割合

| 「比較」名称 | 科目数 | 科目割合(%) |
|--------|-----|---------|
| あり | 574 | 66 |
| なし | 291 | 34 |
| 不明 | 1 | 0 |
| 合計 | 866 | 100 |

表11 「比較」名称あり・なし科目の割合
【スクリーニング削除データ】

| 「比較」名称 | 科目数 | 科目割合(%) |
|---------|-----|---------|
| あり | 209 | 31 |
| あり・論文指導 | 18 | 3 |
| なし | 432 | 64 |
| 不明 | 12 | 2 |
| 合計 | 671 | 100 |

本調査において、科目名に「比較」という用語が用いられている科目は合計で801科目抽出されたが、そのうち約28%の科目が実質的には「比較」関連授業を展開するものではなかった。

「比較」名称あり削除対象入り科目の割合

$$\frac{\text{「比較」名称あり削除リスト入り科目総数 } 227}{\text{「比較」名称あり科目総数 } 801} \times 100 = 28\%$$

$$\text{緑色} + \text{オレンジ色} = \text{「比較」名称あり科目総数 } 801 \text{科目}$$

表12

「比較」関連科目担当教員の専門分野

専門分野について日本学術振興会の科研費で採用されている専門区分に沿って、データを集計した。

| Code | 専門分野 | 科研費審査区分 | | 科目数 | 割合 | 区分別割合 |
|------|--------|---------|--------------------|-----|------|-------|
| | | 大区分 | 中区分 | | | |
| 1 | 美学・芸術学 | 大区分A | 中区分1：思想、芸術 | 101 | 11.7 | 17 |
| 2 | 哲学 | 大区分A | 中区分1：思想、芸術 | 12 | 1.4 | |
| 3 | 思想 | 大区分A | 中区分1：思想、芸術 | 15 | 1.7 | |
| 4 | 宗教 | 大区分A | 中区分1：思想、芸術 | 19 | 2.2 | |
| 5 | 文学 | 大区分A | 中区分2：文学、言語学 | 463 | 53.5 | 53.5 |
| 6 | 歴史 | 大区分A | 中区分3：歴史学、考古学、博物館学 | 47 | 5.4 | 5.4 |
| 7 | 人類学 | 大区分A | 中区分4：地理学、文化人類学、民俗学 | 4 | 0.4 | 9.4 |
| 8 | 地域・文化 | 大区分A | 中区分4：地理学、文化人類学、民俗学 | 78 | 9 | |
| 9 | 政治・政策 | 大区分A | 中区分6：政治学 | 5 | 0.6 | 0.6 |
| 10 | 経済・経営 | 大区分A | 中区分7：経済学、経営学 | 1 | 0.1 | 0.1 |
| 11 | 社会学 | 大区分A | 中区分8：社会学 | 20 | 2.3 | 2.3 |
| 12 | 教育 | 大区分A | 中区分9：教育学 | 10 | 1.2 | 1.2 |
| 13 | その他 | - | - | 2 | 0.2 | 0.2 |
| 99 | 不明 | - | - | 89 | 10.3 | 10.3 |
| 合計 | | | | 866 | 100 | 100 |

表13

「比較」関連科目の種類割合

科目の種類（ジャンル）区分については、本科研費プロジェクトチームで検討し、クロスジャンル、芸術・美術、思想、文化、文学の5種と定めた。

| 科目の種類 | クロスジャンル | 芸術・美術 | 思想 | 文化 | 文学 | その他 | 不明 | 合計 |
|-------|---------|-------|----|-----|-----|-----|----|-----|
| 科目数 | 43 | 85 | 40 | 264 | 401 | 27 | 6 | 866 |
| 割合(%) | 5 | 10 | 5 | 30 | 46 | 3 | 1 | 100 |
| コード | 1 | 2 | 3 | 5 | 6 | 7 | 9 | |

表14

「比較」関連科目において取り上げられているエリア数の割合

| コード | エリア数 | 度数 | 割合（ /839） | 累積割合 |
|-----|----------|-----|-----------|------|
| 0 | 空欄 | 30 | 3.6 | 3.6 |
| 1 | 1エリア | 232 | 27.6 | 31.2 |
| 2 | 2エリア | 210 | 25 | 56.2 |
| 3 | 3エリア | 27 | 3.2 | 59.4 |
| 4 | 4エリア | 8 | 1 | 60.4 |
| 5 | 5エリア | 0 | 0 | 60.4 |
| 6 | 6エリア | 3 | 0.4 | 60.8 |
| 11 | 限定多数エリア | 214 | 25.5 | 86.3 |
| 12 | 不特定多数エリア | 115 | 13.7 | 100 |
| 999 | 欠損値 | 27 | - | |

* 限定多数 = 「英語圏」「西欧」などエリアが限定されており多数

* 不特定多数 = 「諸地域」「多地域」などエリアが限定されておらず多数

表15

「比較」関連科目の題目で採用されているキーワードの割合

| コード | 分類 | 度数 | 割合(%) |
|-----|-----------|------|-------|
| 1 | エリア（言語含む） | 445 | 14.8 |
| 2 | ジャンル | 505 | 16.76 |
| 3 | 対象 | 611 | 20.28 |
| 4 | 学問系 | 358 | 11.88 |
| 5 | 比較重要概念 | 331 | 10.98 |
| 6 | アプローチ | 209 | 6.93 |
| 7 | 人物 | 61 | 2.02 |
| 8 | 年代 | 85 | 2.82 |
| 9 | 動詞系 | 209 | 6.93 |
| 10 | その他 | 157 | 5.21 |
| 99 | 判別不可 | 42 | 1.39 |
| | 合計 | 3013 | 100 |

キーワードの種類区分については、本科研費プロジェクトチームで検討し、10種類と定めた。

社会調査最終報告書【データ編】添付資料

比較文学比較文化教育に関する統計調査

質問紙調査票

パート1：属性に関する問い

- 【Q1】 性別 1. 男性 2. 女性 3. その他
- 【Q2】 年齢 1. 20代 2. 30代 3. 40代 4. 50代 5. 60代 6. 70代
- 【Q3】 所属学部（ご自身の所属学部の特性に最も近い学部名を選択してください）
1. 文学部 2. 外国語学部 3. 教養学部 4. 教育学部
5. 法学部 6. 経済学部 7. 理工学部 8. 医学部
9. 農学部 10. 国際関係学部 11. 文理融合型の学部
12. 健康スポーツ学部 13. 芸術系学部 14. その他（ ）
- 【Q4】 勤務形態
1. 常勤 2. 非常勤もしくは兼任講師 3. その他（ ）
- 【Q5】 比較文学比較文化に関する教育歴
1. 1～5年 2. 6～10年 3. 11年～20年 4. 21年～30年 5. 31年以上
- 【Q6】 母語（ ）語
- 【Q7】 習得言語（第二言語～第四言語まで）
- 第二（ ）語 第三（ ）語 第四（ ）語

パート2：研究活動に関する問い

- 【Q8】 専門となる研究対象に関りのある国（優先順位の高いものから3ヶ国まで）
- （ ）（ ）（ ）
- 【Q9】 専門となる研究対象のジャンル（最も当てはまるもの全てを選択してください）
1. 文学 2. 芸術 3. 社会 4. 思想哲学 5. 文化
- 【Q10】 自身の研究のキーワードを5つ挙げてください
- 1.（ ） 2.（ ） 3.（ ）
4.（ ） 5.（ ）
- 【Q11】 自身の研究で援用経験のある比較文学比較文化の理論および概念（複数選択可）
1. 比較文学 2. 世界文学 3. 間テクスト性 4. 近代性（modernity）
5. 近代後（postmodern） 6. ナショナリズム／国民文学
7. 影響・受容関係 8. エクスプリカシオン・ド・テクスト 9. テーマ論
10. イメージ論 11. 類型学（タイポロジー） 12. 蔵書研究

()

【Q16】授業形態

1. 講義型
2. 演習型
3. ゼミナール型 (講義+演習)
4. オムニバス講義型
5. その他 ()

【Q17】配当学年 (複数回答可)

1. 1 学年
2. 2 学年
3. 3 学年
4. 4 学年
5. 大学院生

【Q18】開講期間

1. 半期
2. 通年
3. クォーター
4. 集中講座

【Q19】教科書使用の有無

(「使用している」の場合は、教科書の書名・出版社をお答えください)

1. 使用している
2. 使用していない

└── (書名:『) , 出版社: ()

【Q20】シラバスに記載の参考書 (優先順位の高いものから3冊まで)

1. (書名:『) , 出版社: ()
2. (書名:『) , 出版社: ()
3. (書名:『) , 出版社: ()

【Q21】科目が設置されている目的 (複数回答可にするか?)

1. 一般教養
2. 専門学科の補完科目
3. 教職科目
4. 専門科目
5. 大学院教育への接続科目
6. その他 ()

【Q22】授業では受講者に外国語能力が求められていますか?

(「はい」と回答された方は、何語かをお答えください)

1. はい
2. いいえ

└── () 語

【Q23】受講者数 (直近に開講された授業の受講者数をお答えください)

1. 10 人未満
2. 11~30 人
3. 31 人~50 人
4. 50 人以上 100 人未満
5. 100 人以上

【Q24】授業で教えるように配慮している比較文学比較文化の理論および概念

(複数選択可)

1. 比較文学
2. 世界文学
3. 間テクスト性
4. 近代性 (modernity)
5. 近代後 (postmodern)
6. ナショナリズム/国民文学
7. 影響・受容関係
8. エクスプリカシオン・ド・テクスト
9. テーマ論
10. イメージ論
11. 類型学 (タイポロジー)
12. 蔵書研究
13. メディア論
14. 脱キャノン
15. 言語越境
16. 再話研究
17. 翻訳
18. 翻訳文学
19. トランスレーション
20. 翻案文学

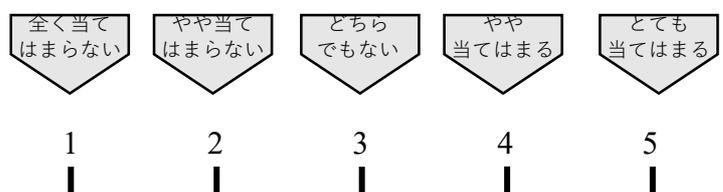
21. 翻訳語 22. ローカライゼーション 23. グローバリゼーション
 24. 通訳 25. 重訳 26. 翻訳者 27. 比較詩学 28. 比較演劇
 29. 児童文学 30. 自然文学 31. 神話・伝承 32. 比較神話学
 33. 比較芸術 34. クロスジャンル 35. アダプテーション
 36. ジャポニズム 37. 文学と絵画 38. 文学と写真 39. 文学と映画
 40. 挿絵・イラストレーション 41. 文学と音楽 42. 芸術とスポーツ
 43. 漫画・アニメの比較研究 44. 比較舞踊学 45. 比較文化
 46. 異文化理解 47. ポストコロニアル 48. オリエンタリズム
 49. エキゾティシズム 50. ジェンダー 51. フェミニズム
 52. クィア批評 53. 階級 54. 文化交流・文化交渉 55. 文明の衝突
 56. 異文化接触と宗教 57. 戦争と占領 58. 留学 59. 亡命
 60. ディアスポラ 61. 中東世界 62. イスラム 63. 他者論
 64. 異人論 65. 比較日本文化論 66. 日本人論 67. 外地
 68. 国際共通語 69. Lingua franca 70. エスペラント 71. 異化と同化
 72. 比較宗教 73. 普遍性 74. 東アジア比較文学 75. 漢字文学と日本
 76. 漢字文化圏 77. 在日文学 78. 東アジア比較芸術
 79. 比較思想・比較哲学

【Q2 5】本科目に対して、学生は何を求めていると思いますか？

(リアクションペーパーから見えてくること等を自由にお書きください)

【Q2 6】受講者の授業に対する反応について

(5段階のうち最も当てはまるものをお答えください)



1. 受講者の反応は意欲的であった

2. 受講者は授業内容を理解していた



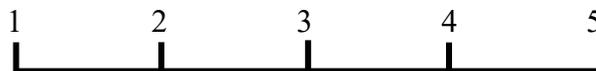
パート4：比較文学比較文化教育に関する問い

※上記の科目に限らず、比較文学比較文化教育に対するあなたの考えをお答えください。

【Q27】比較文学比較文化の存在が、大学（院）教育において定着していると思いますか？
（5段階のうち最も当てはまるものをお答えください）



1. 定着していると思う



2. 定着していない理由についてお書きください

※「全く当てはまらない」「やや当てはまらない」を選択した方限定

【Q28】自身が比較文学比較文化関連の授業で工夫していることはありますか？

（自由にお書きください）

【Q29】 今後あったら良いと思う教科書はどのような内容ですか？

(自由にお書きください)

【Q30】 比較文学比較文化関連の授業で難しいと感じていることはありますか？

(自由にお書きください)

エキストラパート

※以下の問いは、お時間があればお書きくださいますなら幸いです

【Q31】 自身がかつて感銘を受けた比較文学比較文化関連授業はありますか？

(特にあれば、その授業の方法や内容について自由にお書きください)

【Q3 2】その他、比較文学比較文化教育について思うことがあればお書きください

質問は以上となります。

お時間をとっていただき、まことにありがとうございました。

※上記の質問に対するご回答は以下のグーグルフォームよりお願いいたします。

<https://forms.gle/2dYtAzijaAYcPuoU8>